



聖徒の道

7 1978

もくじ

大管長会

スベンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

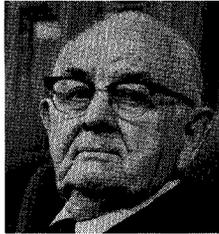
十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルパート・L・ステイプラー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トマス・S・モンソン
ボイド・K・バックナー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

安息日——喜びの日	スベンサー・W・キンボール	1
質疑応答		7
福音の教えを实践する教会員となる	オルソン・スコット・カード	13
聖餐と誓約	W・コール・ダラム・ジュニア	15
ローカル・ニュース		18
きせき	シェリー・ジョンソン	21
世界の子供たちの証		25
ひとえむすびプレスレット		27
今も奇跡が？	ジェイ・A・ペリー	32
断食——喜びの賜	シェリル・コンディ・ケンプトン	37
教会の活力の基	スベンサー・W・キンボール	40
クリスチャンの改宗	ゴードン・アービング	42
どちらでも違いはないわ	バーバラ・ホール	48

顧問

マリオン・D・ハンクス
ロバート・D・ヘイルズ
ディーン・L・ラーセン
リチャード・G・スコット

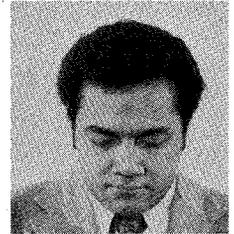


教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)



「聖徒の道」

八木沼 修一 (翻訳部長)

表紙の説明：

ハワード・ポスト画、田舎の安息日。

聖徒の道 7月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-30

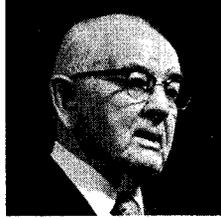
印刷所 株式会社 精興社

配送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター



安息日—喜びの日

大管長
スペンサー・W・キンボール

ある年の秋、私はステーク部大会に出席するために、合衆国西部の田園地方を訪れた。私が着いたのは土曜日の夕方、その晩はステーク部長宅に泊まった。翌朝、私たちは大会の会場に向かった。距離にして、8、9キロほどであった。その途中、私たちは幾つかの農場の前を通ったが、農場の様子から、人々が安息日を守っていることは明らかであった。

小麦の実った美しい畑には、前日の夕方から置かれているのであろう、農機具が放置されていた。干し草の山も半分積みかけで、まだ畑には多くの干し草が残されていた。また、小麦の刈取りも途中であった。すべてが休息しているようであった。

私たちは町に入ったが、そこにも、平安と

のどけさがただよっていた。槌の音も聞こえなければ、機械の音もしない。人の働いている気配は全くない。私たちが見たものはただ、教会堂に向かう人々だけであった。

そこで私は、この素晴らしい情景についてステーク部長と語り合い、ホームティーチャーがステーク部内をくまなく回って、ソルトレークから訪問者があることをみんなに話してもしたのですかと尋ねた。するとステーク部長は答えた。「いいえ、教会員の皆さんはいつもこのようにして安息日を聖く過ごすんです。本当にうれしいことですよ。このステーク部では、ほとんど全部の家族は毎週日曜日、教会の集会に出席します。」彼の言う通りであることは記録が示していた。

そよ風が吹き、静かで、暖かく、心地良い、



麗しい日であった。かなたの丘は、すでに秋の色を濃くしていた。美しい畑と家、満たされた快い雰囲気がある。その日の集会は非常に平安に満ち、得るものが多く、満ち足りた集いであった。

それとは対照的な経験もある。ステーキ部大会に出席するために別の地方を訪れた時、私は日曜日の朝早く、ひどい騒音に目を覚ました。狩猟服を着込み、ライフル銃を手にして出かける人々の自動車の騒音であった。山へ鹿狩りに出かけようとしていた。

またある安息日に、私は田舎を車で走った時、汗びっしょりになって草刈機械や干し草作業車を運転し、干し草作りに励んでいる人々を大勢見た。

さらに、映画館の前に長蛇の列をなしている人々、ピクニック、バスケットや運動用具をもって海浜や峡谷に向かっている人々を、安息日に見かけたこともある。

現在、世の多くの人々が安息日の律法を犯している。安息日になると、湖にたくさんのボートが浮かび、海岸に人が群がり、映画館が満席になり、ゴルフ場に人々が集まる。安息日がロデオや競技、家族のピクニックに絶好の日とされ、野球の試合さえこの聖日に行なわれる。多くの人々がこの日をいつもと同じ商いの日とし、聖なる日という意識を持っていない。また、多くの人々がこの日を行楽の日としているため、彼らが楽しみに興じ散財することをねらって、仕事に精出す人々も大勢いる。

多くの人々は、安息日の律法を破ることをそれ程重大視していない。しかし、私たちの天父から見ると、そうした行為は大切な戒めに従っていないことになる。シナイ山を下りて来たモーセは、恐れおののくイスラエルの民に、生活の規範である十戒を与えた。しかしこれらの戒めは新しいものではなかった。それはすでにアダムとその子孫に告げ知らされ、時の初めからそれに従って生活するように命じられていたもので、主がモーセに繰り返

返し与えられたにすぎないのである。これらの戒めは、人々が「主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを」(アブラハム 3:25)なすかどうかを見るため、この世に先立って天上の会議で定められた試しの一部なのである。

十戒の第一番目の戒めは、主を礼拝するようというものである。そして、第4番目に、この礼拝を行なう特別な日として安息日が指定されている。

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。……」

安息日を覚えて、これを聖とせよ。

六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。

七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。

主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。」(出エジプト 20:3, 8—11)

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。」これこそ、シナイ山の雷鳴をもって神が下された神聖な命令であり、廃止も変更もされていない。むしろ、近代に再び強調されたほどである。

「されどこの主の聖日に於ては、いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉りて、兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。

而して汝この日には他に何事をもなすことなかれ。言い換うれば汝悦びを以て充されんため、真心をこめてその食物を支度することのみを為すべし。」(教義と聖約 59:12—13)

主の日に狩りや魚釣りをすることは、この日を聖としない。安息日に耕作や収穫をすることも、主の日を聖とはしない。この日に峡谷へピクニックに出かけること、競技やロデオ、ショー、その他の催しに行くことは、主の日を聖としない行為である。

妙な話であるが、末日聖徒の中に、ほかの面ではすべて忠実でありながら、安息日のことになると自分の行為を正当化し、時折教会の集会を休んで遊びに出かけてしまう人々がいる。解禁の日に行かなければ釣りのだご味が味わえない、日曜日を抜いたら連休が短くなる、安息日に行かないと見たい映画を見過ごしてしまう、これが彼らの言い分である。しかも、家族ともども安息日の律法を破るのである。

救い主は言われた。「それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。」(マタイ 5:19)

スポーツ、ピクニック、運動競技、映画等のレクリエーションを週日に行なう分には、何ら問題はない。健全なレクリエーションは生活に活気を生む力となるからである。そして教会は、組織として、この種の活動を積極的に推し進めている。しかしすべての事柄には、ふさわしい時と場所がある。すなわち、働く時、遊ぶ時、礼拝する時があるのである。

安息日を守るには犠牲と自制が要求されるとよく言われる。しかしその言葉は当たらない。ただ、計画したことをいつ行なうかというだけのことである。時間は十分にある。特に近年は、週の6日間の内に働き、遊ぶ時間を十分にとることができる。安息日を選けて、週日の活動を計画し行なう多くの時間がある。

あるスカウトの団体は、毎年夏季に、安息日に出かけて次の安息日に帰ってくるキャンプを計画していた。そのため、この連盟に所属していた末日聖徒の青少年は、連続して2回、日曜日の教会活動ができなかった。そこで教会が連盟の役員にスケジュールの変更をお願いしたところ、キャンプの日程が金曜日から翌週の金曜日までに変更された。しかも、その間の日曜日に、キャンプに参加した少年たちのために宗教プログラムが組まれたのである。

他方、あるセミナー・グループは、日曜日に山で集会を開く計画を立てた。そして、そのプログラムを認めてもらうために、その日の活動の一環として証会を計画した。こうして彼らは集会を開き、霊的な一時間を過ごした。しかし、証会の後は、ピクニック、ゲーム、ハイキング、山登りといろいろな活動が行なわれ、安息日の精神など微塵も見られなかった。一時間を敬虔に過ごしたからと言って、その日一日が聖日になるわけではないのである。

戒めは、人から何かを奪うためにあるのではない。神がその僕に下されるあらゆる戒めは、それを受け入れ、従う人々を益するためにあるのである。従って、安息日を注意深く、厳密に守る人には恵みがもたらされる。一方、神の律法を破る人は苦しみを被るのである。

安息日の戒めには、人の行動を制限する部分がある。すなわち、安息日には「なんのわざをもしてはならない」とある。しかし同時に、積極的に行なわなければならない事柄もある。「祈りの家に行きて……汝の聖式を捧ぐべし。……いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なればなり。……悦ばしき心と愉快なる顔容とを以てなせ……」(教義と聖約59:9—10,15)

安息日は、ただいたずらに家の周囲を散歩し、庭をぶらぶら歩き回るためにある日ではない。この日は、教会の集会に出席して主を礼拝し、福音の知識を得、家族と楽しい時間を過ごし、音楽と歌で精神を高揚させるためにあるのである。

安息日は、価値ある、聖い事柄を行なう聖日である。仕事とレクリエーションを控えることは大切であるが、それだけでは十分でない。安息日には思いと行ないを建設的なものにする必要がある。安息日に何の目的もなくぶらぶら歩き回る人は、安息日の戒めを破っている人である。この戒めを守る人は、ひざまずいて祈り、レッスンを準備し、福音を学び、瞑想にふけり、病気の人や悲嘆に暮れている人を見舞い、宣教師に手紙を書き、午睡

し、健全な本を読み、出席するよう期待されているすべての集会に出席する日として、この日を過ごすであろう。

私の知り合いのひとりに、日曜日に一冊良い本を読めば教会の集会で学ぶ以上のものが得られる、集会の話は自分には物足りない、と言う人がいる。彼は善良な人ではあるが、考え違いをしている。私たちが安息日の集会に出席するのは楽しむためでもなければ、ただ単に教えを学ぶためでもない。主を礼拝するために集うのである。それは個人の責任である。もしも心から主を礼拝したいと思う人

☆

☆

私たちが安息日の集会に出席するのは楽しむためでもなければ、ただ単に教えを学ぶためでもない。主を礼拝するために集うのである。あなた自身が集わなければ、それができないのである。だれもあなたに代わって礼拝することはできない。あなたが自分自身で主を礼拝しなければならないのである。

☆

☆

であれば、説教台から何が語られようと、主を礼拝するために集会に出席し、聖餐にあずかり、美しい福音に思いを向けることだろう。従って、あなた自身が集わなければ、それができないのである。だれもあなたに代わって礼拝することはできないのである。

私たちは、他の戒めと同様、この戒めに關しても予言者ヨシュアの言葉に従おうではないか。「それゆえ、いま、あなたがたは主を恐れ、まことと、まごころと、真実とをもって……主に仕えなさい。……あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わた

しとわたしの家とは共に主に仕えます。」(ヨシュア24：14—15)

そうする時に私たちは、イスラエルの民に約束された祝福を得ることができるのである。

「あなたがたはわたしの安息日を守り、またわたしの聖所を敬わなければならない。わたしは主である。

もしあなたがたがわたしの定めに従い、わたしの戒めを守って、これを行うならば、

わたしはその季節季節に、雨をあなたがたに与えるであろう。地は産物を出し、畑の木木は実を結ぶであろう。

あなたがたの麦打ちは、ぶどうの取入れの時まで続き、ぶどうの取入れは、種まき時まで続くであろう。あなたがたは飽きるほどパンを食べ、またあなたがたの地に安らかに住むであろう。

わたしが國に平和を与えるから、あなたがたは安らかに寝ることができ、あなたがたを恐れさすものはないであろう。」(レビ26：2—6)

しかし現在、安息日だからと言って機械を止めることはできないということで、多くの産業が仕事を続けている。これらの産業の労働者は、日曜日にも「働かなければならない。」現実はそのようであるかもしれない。しかし、「必要は発明の母」である。私は、産業に従事する人々全員が安息日を聖日にしようと決心するならば、日曜日に働く必要がないように、新しい生産方法が発明されるであろうと考えている。

救い主は、安息日にも牛が穴に落ち込むことのあることを知っておられた。そのような場合、必要であれば、人が穴から牛を引き上げてやらなければならない。しかし、毎週故意に牛を穴に落とす者もいない。また、穴に落ち込んだ牛を放っておく者もいないであろう。

安息日でも働かなければならない人々のいることは確かである。事実、ある種の仕事、例えば病人の看護等は必要であり、安息日を聖い日とするのに役立つ。しかし、このよう

な仕事に携わる時に特に考慮しなければならぬのが、その時の私たちの気持ちである。

富を増すために安息日に働こうとする人々は、戒めを破っている。必ずしも安息日にしなくてもよい仕事で得たお金は、不浄なお金だからである。主の戒めに従わずに安息日に働き、それによって得た不浄な収入の一部を什分の一あるいは献金として主に差し出す人を想像していただきたい。現在も、旧約の時代と同じように、主に差し出す捧げ物は、「傷のないもの」でなければならない。しかし、不当に安息日に働いて得たお金は、決してこの条件を満たせないのである。

また、安息日に日用品を買ったり、催しに出かけたりする人々、すなわち商店や娯楽場の営業を助長する人々も、安息日を破っている。もしもイスラエルの民と同じように主にそむいて、主の日に物の売り買いをし、商売し、またそれを助け、主の戒めを破るならば、大きな罰が下されると警告されている。これはいつの時代にも適用する、全人類に対する警告である。

古代のイスラエルの律法では、安息日を犯した人々には直ちに厳しい罰が下されるという規定があった。しかし現在はその規定がない。だからと言って、現在は当時ほどこの律法を重要視していないというわけではない。現に、主から予言者ジョセフ・スミスに下された啓示の中で、安息日を尊ぶことの大切さが強調されている。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様、祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」(教義と聖約59：9)

特に、これは従わなければならない戒めであるということに注意していただきたい。

「そは誠にこの聖日は、汝命ぜられて働きを休み、いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なればなり。

さりながら汝の誓言は、正しく毎日常に神に捧げられざるべからず。

されどこの主の聖日に於ては、いと高き者

に汝の捧物と聖式とを奉りて、兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。

而して汝この日には他に何事をもなすことなかれ。ただ汝が断食を完からしめんため、言い換うれば汝悦びを以て充されんため、真心をこめてその食物を支度することのみを為すべし。」(教義と聖約59：10—13)

ここで注目していただきたいのが、主は安息日とそれを正しく守ることの大切さを強調する中で、「正しく毎日常に」行なうことを民に求めておられるということである。

私は訪問する先々の地方で、安息日に仕事を休み、戒めに従う忠実な人々にいつも会う。安息日には決して家畜を移動しない牧畜家、果物の出回る季節には昼夜を問わず営業するが安息日には必ず店を閉じる道端の果物店、主の日には店を開けない薬局、食堂、屋台店。商店主も主の律法に従うことに本当の満足を得ているように思われる。私はこのようにして働く善良な人々を見ると、うれしいだけでなく、彼らの信仰と実直さに祝福が与えられるようにと願う気持ちが湧き上がってくる。

主は予言者イザヤを通して次のように言っておられる。

「『……わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず、むなしい言葉を語らないならば、

その時あなたは主によって喜びを得、わたしは、あなたに地の高い所を乗り通らせ、あなたの先祖ヤコブの嗣業をもって、あなたを養う』。これは主の口から語られたものである。」(イザヤ58：13—14)

☆

☆

質 疑 応 答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



マサチューセッツ州ケンブリッジ
インスティテュート 指導主事
スティーブ・ギリラント

末日聖徒は日曜日に勤務する仕事 に就いてはならないのでしょうか。

「ここの勤務は交替制なんだ。だから、日曜日でも出勤しなくちゃならないことがある。」係長がこのように言いました。この職場で働くようになった末日聖徒は、係長の言葉を聞きながら考えました。安息日は聖日として守りたい。でも生活するだけの収入は得なければならない。それに、就職口はあまりない。安息日を大切にしたい。この収入の良い仕事をあきらめることがはたして彼にできるのでしょうか。彼はこのことをどのように考えればよいのでしょうか。

安息日の仕事について、ある人は、「安息日に出勤しなければならないようなら、転職す

るんだね」と、いとも簡単に言っただけかもしれない。しかし、この問題はもっと深く掘り下げてみる必要があります。

例えば、ある種の公務は、安息日にも休めません。病院の職員や救急車の運転手、警察官、消防士等、緊急の仕事に従事する人々は常時勤務体制をとってなければなりません。もしもバスやタクシーが日曜日に走らなければ、他に交通手段のない人々はどのようにして教会へ行けるでしょうか。また、日曜日の旅を最小限にしようとして旅行者が利用するホテルで働く人々についてはどうでしょうか。

ある種の仕事は日曜日にも欠かせません。また、このような仕事をすべて教会員でない人々に託すという立場をとってはならないと思います。すべての貴い職業に善良な末日聖徒が携わり、同僚や奉仕する相手の人々に感化と祝福を与えるようにすることが必要です。

従って、安息日の仕事の問題は常に個人の問題となります。ある種の仕事は日曜日に行なうことが正当と認められ、また同時に必要です。このことを理解した上で、私たちは、「この仕事は日曜日でなければできないものだろうか」と自問してみる必要があります。

たとえ自分の決定が多くの人々の生活に影響を及ぼすものであっても、その決定に伴う責任はすべて自分にかかってきます。しかし、私たちは自分ひとりで決める必要はありません。このような大切な決定には、靈感と導きを与えて下さると、主は約束しておられます。

すでに日曜日の出勤を求められる仕事に就いている人は、次のように自問してみること

です。

日曜日の勤務を変える方法は何かないだろうか。スケジュールを変更できないだろうか。

自分が日曜日に働かなければ、職場の同僚に迷惑がかかるだろうか。日曜日の交替勤務を変えられないだろうか。

この職場を辞めたら、家族はどうなるだろうか。家族の生活が保証され、しかも教会のすべての集会に出席し、主の戒めに従うことのできる勤め口が、ほかにあるだろうか。

このまま仕事を続けていて、日曜日の集会に出席できるワード部がどこか近くにないだろうか。

自分の仕事を口実にして怠けてはいないだろうか。

夫婦で、あるいは家族全員で以上の事柄について話し合い、あなたの答えを主に話し、相談して下さい。

そして、ひとたび主に受け入れられる決定を祈りの気持ちをもって下したならば、たとえ、それが日曜日の勤務を求める仕事を継続するという決定であっても、あるいはそのような仕事にこれから就くということであっても、みたまの導きがある限りその道を歩み続けるようにしましょう。その時、あなたのことを誤解して非難する教会員がいても赦します。

日曜日の勤務がある時に、どのようにすれば引き続き霊的な成長を図ることができるでしょうか。次の提案は、末日聖徒の実際の体験から引き出したものです。

1. 安息日の初めに特別な礼拝の時間をとる。結婚しているならば、家族と共にそのような時間をとる。遠出する時や、時間が不都合な場合、土曜日の夕方から安息日にしている人もいる。
2. 旅行する場合、聖典や教会の出版物を読む。神権会に出席できない兄弟たちにとっては、「メルケゼテク神権個人学習ガイド」の個人学習が役立っている。
3. 自動車の運転やその他、読書に集中できない仕事の時は、カセットテープを利用するとよい。
4. たとえ職場で着替えなくてはならなくても、安息日の服装で出かける。特に、近くのワード部の聖餐会に出席できる場合は、なおさらである。
5. 機会を見つけて、人に親切にする。「今日は働きたくなかったんだ」というような態度をとらない。また、勤務していることを弁解しない。よく祈り、周囲の人々に祝福をもたらすことができるよう主の導きを求める。
6. 伝道する。日曜日を意識しているのはあ



なたひとりではない。日曜日には平日よりも多くの人々が宗教の話に心を開くものである。証を述べなさい。

7. できる限り多く教会の集会に出席する。時には仕事着で集会にかけつけなければならぬことがあるかもしれない。しかし、服を着替えるのに時間がかかって集会に出席できないよりはよい。

8. ある医師は、当直の日曜日には家族を病院に呼んで一緒に食事をし、その後部屋の片隅で少しの時間聖典を読み、福音について話し合うようにしている。また、子供たちは日曜学校で学んだことを父親に話して聞かせる。その様子を見ていた他の人々も、教会員ではないが、日曜日には家族を病院に呼んで一緒に食事をするようになった。静かな模範は多くの人々の生活に大きな影響を及ぼす。

9. ある兄弟は、日曜日に家族の祈りをしなかったことは一度もない。日曜日に家を留守にする時には、家族に電話をかけ、受話器の回りに全員を集めて電話を通して祈りをする。

10. 平日に祈りと瞑想の時間を多くとる。

11. 休憩時間や暇な時間を聖典を読んだり、瞑想したりすることにあてる。休憩時間に他の人々を誘い、一緒に聖典を読み、学ぶ。

日曜日の勤務にあたっている人々は、ほとんど教会の集会に出席できないという状態です。そのため、ある教会員は最初集会に出席できないことに不平を言っていました。今では他の聖徒たちと一緒に礼拝したいという飢えさえ感じるようになってきました。「聖徒たちと集って一緒に讃美歌を歌えるということは、素晴らしい特権です。今の私にとってとても大切なことは、教会のすべての集会に出席するということです。ですから、12時間

の勤務を終えた後でも、集える場所で教会の集会に出席するようにしています。」

また、ほかの日に家族と共に特別な礼拝行事を開いている人もいます。

このように、日曜日に仕事をしていても毎週安息日を過ごそうと努めている忠実な聖徒たちがいます。彼らを見ると、私は、日曜日に仕事をしていなくても時々特別に霊的な日としてこの日を過ごしていないことがあることを反省させられます。私はもっと安息日をふさわしく過ごすようにしたいという思いに駆り立てられるのです。

また、日曜日に勤務する人々が良い安息日を過ごせるように助けることも、日曜日に働いていない私たちの責任ではないでしょうか。ホームティーチャーや仲良しの会員は、神権会や聖餐会の話をもめて、あとで彼らに話して聞かせるようにしたらどうでしょうか。

できれば、日曜日の仕事は避けるようにすべきです。そして、日曜日に勤務しなければならない場合は、安息日を守るように最善を尽くす必要があります。主は私たちの心の思いに従って私たちを裁き、私たちが誠実に主の助言を求める時に導いて下さいます。そして、義しい生活を送るならば、主は人生の障害をすべて克服できるよう私たちを助けて下さるのです。神のすべての賜と同様、安息日も人のために定められました。ですから、私たちの立場がどうであろうと、私たちが主の助けを求めるならば、主は安息日の祝福にあずかれるよう私たちを導いて下さいます。

福音の教えを実践する 教会員となる

オルソン・スコット・カード



ある人が、友人を亡くして初めて福音の教えを実践する教会員になることの本当の意味を学んだそうである。彼は次のように言っている。「私は友人のブライアンを病院に見舞うつもりでした。けれども、火曜日の夜はホームティーチング、水曜日は委員会の集会、木曜日は神権個人面接の予定がありました。それに、木曜日は妻がピーハイブの少女たちをローラースケートに連れて行くことになっていました。そして金曜日の夜には、聖餐会の話の原稿を書かなければなりません。このように、1週間の予定がぎっしりとつまっていたんです。」

そうこうしているうちに、土曜日の朝、ブライアンの息子から電話がかかってきた。「父と親しくして下さったあなたにお知らせした方がよいと思ひまして」と、電話の主は言った。

彼はその時の気持ちを次のように述べている。「知らせていただくだけではすまされない気持ちでした。時間が逆戻りして、たとえ少しの時間でも病院へ見舞いに行くことができればと思いました。昔話に花を咲かせ、彼がどんなにかけがえのない友人であるかを伝えてあげたかったです。恐らく、死を前にして痛みと恐れと孤独感に襲われていたことでしょう。そのような彼を慰めてあげられたらと

思うと、いたたまれない気持ちでした。けれども、実際は教会の責任に追われて、とうとう彼を見舞いに行けなかったのです。」

この経験から彼は次のような教訓を得た。「教会の責任を果たすことに熱中すると、福音の教えを実践することを忘れてしまうことがある。」

これは次のように言い換えられると思う。すなわち、私たちの出席する集会は備えをするためにある、と。集會に出席することは、私たちの教会活動の一部に過ぎない。私たちは何をしなければならぬかを学ぶために集會に出席するのである。

私たちは、教会の集會だけでなく、家庭や職場、地域社会の中、友人および見知らぬ人々との交際、あるいは個人の祈りの中にも福音を生かすことができる。

教会は教会員に多くの活動の機会を与えている。すなわち、ホームティーチャーや訪問教師には、他の人々に奉仕する素晴らしい機会がある。また、教師は生徒の信仰を鼓舞し、感化し、彼らに新たな信仰心を抱かせることができる。さらに定員会指導者は、兄弟たちを整えて良い働きをさせることができる。

しかし、ただ教会の責任を果たすにとどまり、集會に出席しているから自分は十分な働きをしていると満足しているようでは、私たちはある意味で、タラントを地中に埋めた僕のようなものであると言えよう。教会は私たちにたくさんの機会を与えてくれる。しかし、それらの機会を十分に生かして改善を図る責任は私たちに委ねられているのである。

いくら良い働きをしても、それが教会の建物の中だけに限られるとしたら、私たちは人々の前で光を輝かせていると言えないのではないだろうか。

また、レビ人や祭司のように、教会のことだけにとらわれて、見知らぬ人々に思いやりを示さないとしたら、私たちは隣人を自分のように愛していると言えないのではないだろうか。

主は私たちに、各自の霊を鼓舞し、強め、肉体を休める日として安息日を与えて、その後の1週間社会に出て行き、完全に福音に添った生活ができるようにして下さった。

「たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。」(Iコリント13:2)

これは次のように言い換えることができる。すなわち、教会のすべての集會に忠実に出席し、自分の召しをことごとく果たし、毎月第1週にホームティーチングをすませ、あらゆる面で活発な教会員であったとしても、他の人々に愛を示し、奉仕する時間を見いだせないとしたら、その人は聖徒とは言えない、と。その人は、心と勢力と思いと体力を尽くして主を愛していない。また、自分自身のように隣人を愛していないからである。

安息日を反省の日としようではないか。(1週間、私たちはどのように主と隣人に奉仕をしてきたであろうか。)

安息日を、集會に出席し、霊を鼓舞し合い、主にどのように仕えればよいかを学ぶ日としようではないか。

そして残りの6日間を、キリストの模範に倣って、すべての人に喜びをもたらす日々にするのである。主は次のように言われた。「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であった時に宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれた……」(マタイ25:35—36)

私たちの周囲には霊的および物的な問題を抱えて助けを必要としている人々が大勢いる。従って、福音の教えを実践する教会員となるために、私たちはスケジュールをぬってそのような人々の必要を満たす時間をとるようにしなければならぬ。私たちが周囲の人々に捧げる贈り物は、取りも直さず救い主に捧げていることになるからである。

聖餐と誓約

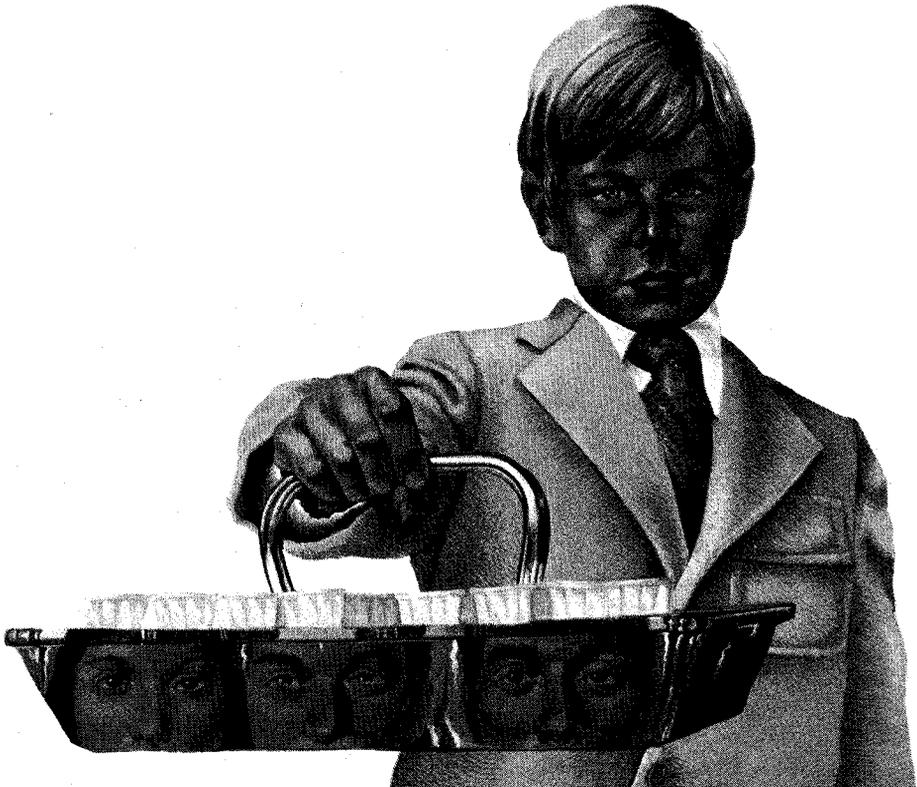
W・コール・ダラム・ジュニア

聖餐には、静かに席に着いて、キリストの贖いを記念するパンと水をいただきながら主のことを考えるということ以上の深い意味があると、私は思う。聖餐は悔い改めに欠くことのできない要素である。「汝誠に真にへりくだりたる心と悔いる精神とを以て、汝の神に義しき捧物となすべし。汝の……祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。」
(教義と聖約59：8—9)

私たちが積極的に個人の特別な捧げ物を携

えて聖餐に臨むならば、すなわち、救い主と自分を隔てている自分の弱点を克服しようという謙遜な思いで聖餐を受けるならば、聖餐は私たちの生活にあって一層意義深いものとなるであろう。

聖餐に関わるすべての事柄は、私たちに主の贖いに対する理解を深めさせるためにある。聖餐式が初めて定められた時、救い主は十二使徒たちに、主の贖いを記念して聖餐をいただくようにと命じられた。「わたしを記念する

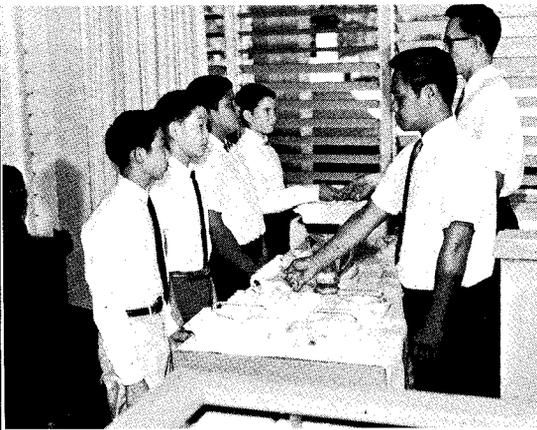


ために、このように行いなさい。」(ルカ22：19) また、ワード部や支部で毎週日曜日に祭司が述べる聖餐の祝福の言葉にも次のようにある。「御子のからだの記念にこれをいただくよう……かれらの為に流したまいし御子の血の記念にこれをいただくよう、また御子を常に忘れぬことを永遠の父なる神の御前に証明し……」(教義と聖約20：77, 79)

では、本当の意味でキリストを記念するにはどうしたらよいのだろうか。私たちが救い主にさらに近くなれるよう、聖餐はどのような機会を与えてくれているだろうか。まず私たちは、聖餐の祈りの中で言われているキリストのみ名を受けるとい言葉から、贖い主との個人的な関係を自覚する。私たちは教会に入る時、キリストのみ名を受け。すなわち、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員と言われるようになる。しかし、キリストのみ名を受けるといことには、教会員と呼ばれること以上の意味がある。なぜなら、バプテスマによって誓約を交わしたことによって、

私たちは「キリストの子」となり、キリストによって「精神を新に」されたからである(モーサヤ5：7)。キリストのほかに救いを与える名前は無い(モーサヤ5：8)。そして、このみ名を受けるにふさわしい生活をする時に、私たちはキリストの贖いの効力をよく理解できるようにになり、証も強まるのである。

戒めを守るという聖餐の約束を進んで守る時、私たちの霊は強められる。行ないによって誓約を新たにし、決意を再確認することの大切さを理解し始めると、真の意味で、聖餐を受けることには、毎週日曜日2回行なわれる聖餐式にただ出席すればよいというだけでなく、それ以上のものが要求されることに気づくであろう。聖餐は私たちの生活全般に関わる事柄である。しかしこのことは驚くに当たらない。なぜならば、聖餐によって新たにする誓約は、つきつめれば「あなたの全身全霊を捧物としてキリストに捧げる」ことを要求しているからである。(オムナイ26)。しかしこれには大変な努力が要る。そして、これを



可能にするためには次のことを認識する必要がある。すなわち、聖餐は完成という長い道のりを、私たちが歩みやすいように1週間ずつに分けるものである。聖餐は、主が私たちの手を取り、私たちの霊を清め、重荷を軽くし、主の道に導いて下さるひとつの手段である。

このように考えると、聖餐は誓約を交わすひとつの過程、主の贖いを思い起こし、決意を新たにす過程であると言える。ではそのような機会を最善のものとするには、どうすればよいだろうか。この質問に、何か簡単な、機械的な答えがあると考えるのは間違いである。しかし、私たちの生活に聖餐の影響を強く及ぼすために、簡単にできることがいくつかあるのでそれらをまとめてみよう。まず、主と誓約を交わす機会を与えてくれる聖餐式に出席する。また、「御子を常に忘れぬ」ことに対して「アーメン」と同意を表わせるように、聖餐式前に備えができるよう十分な努力を払う。心を打ち込んでたびたび祈り、聖句の意味をよく思いめぐらすことは、救い主のことをいつも思い起こす大きな助けとなる。絶えず神に関わる事柄で自らを満たそうとしなければ、霊的な面でイエス・キリストのことを常に思い起こすことはできない。

さらに、私たちは具体的な決意をするようにしなければならない。効果のある方法をひとつ提案しよう。日曜日の早朝30分間聖典を読み、次の30分間、これまでに決意したことを祈りの気持ちをもって振り返り、これからの7日間に何をすることを主が自分に望んでおられるかを尋ねるようにする。主は一度に何もかもするには私たちに望んでおられない。しかし誠実に耳を傾けるなら、私たち

の心を開いて下さり、主が今望んでおられることを理解させて下さる。主からそのような導きを受けた時、あるいは、たとえ初めなかなか導きを感じられないようであっても自分なりにある決心をした時には、聖餐を受けながら具体的に決意を固めるようにする。そして、このように決意した事柄を書き留めておくと、必要な時に取り出し、その大切さを再認識することができるであろう。

私たちがこのような方法で、誓約を交わすことに真剣に取り組んだからといっても、完成への道が歩みやすいものになるという保証はない。むしろ逆に、主と固い約束を交わしながらこれらの約束を完全に履行できない自分の弱さを痛感し、落胆したり、罪の意識を感じたりすることがあるものである。しかし、落胆してはならない。むしろ、謙遜になり、主の贖いと憐みを心から感謝するようにすべきである。このようにすれば、聖餐は心に計り知れない安らぎをもたらす。そして、私たちに弱点があるにもかかわらず、主は新たな力を私たちに与えて下さるという確信を毎週主からいただけるのである。生活の中に主の贖いの恵みを生かし、自分の弱点を克服しようとする時、救い主を常に忘れないということは精神的な報い以上のものをもたらすようになる。

キリストに近づこうとする時、私たちはキリストのことを絶えず思うことによって、キリストの愛をさらに深く感じるようになる。また、死よりも強い絆で主と結ばれるようになる。こうして、心に留めるという知的な作業として始めたことが、みたまの勧めを完全に受け、救い主と完全に一致することのできる力となるのである。



名古屋に ステーキ部誕生

5月10日(木)午後7時より、名古屋市内の港湾会館において、十二使徒評議員会エズラ・タフト・ベンソン会長の管理の下に、日本名古屋伝道部中部地方部の特別大会が催された。そして、エズラ・タフト・ベンソン長老、七十人第一定員会会員のアドニー・Y・小松、菊地良彦両長老、地区代表の渡辺驩長老ほか1,000余名が出席したこの大会で、新しいステーキ部が組織された。

新しいステーキ部の役員ならびに管轄ユニットは以下の通りである。

新しいステーキ部長会



第一副ステーキ部長
山本 修



ステーキ部長
土田 勝



第二副ステーキ部長
古芝 健三

高等評議員

日 坂 遜
 福 島 克 明
 白 木 守
 千 木 尚 之
 中 村 作 典
 白 井 正 己
 大 野 正 宣
 浅 川 武 彦
 湯 浅 博 満
 佐 藤 讓
 竹 本 洋 一
 高 鳥 雄 三
 梶 川 勲

高等評議員代理

管轄ユニット：

名古屋第1ワード部（福山照夫監督）
 名古屋第2ワード部（大橋稔郎監督）
 名古屋第3ワード部（小林重次監督）
 名古屋第4ワード部（池田茂美監督）
 岡崎ワード部（阿南幸夫監督）
 岐阜ワード部（立沢藤吉監督）
 豊橋支部（松野六郎支部長）
 一宮支部（松井利幸支部長）

ステーキ部幹部書記 石 川 賢 一
 ステーキ部書記 市 橋 弘 彦

神殿用地の旧建物 解体進む

旧建物（元日本東京伝道部）の解体作業が進められています。

今回は、5月26日現在の状況をお知らせします。



後方の白い建物はノルウェー大使館



中央の建物（三角屋根）は、現在神殿の建築現場事務所となっているが、将来取り壊される予定



後方の木立は有栖川宮記念公園



アジア地域事務局 献堂される

5月9日(火)午前8時より、十二使徒評議員会エズラ・タフト・ベンソン会長を迎えて、アジア地域事務局の献堂式が行なわれた。式には七十人第一定員会会員のアドニー・Y・小松、菊地良彦両長老ほか、関係者多数が出席し、ベンソン会長によって献堂の祈りが捧げられた。

次第に緑の濃さを増してゆくこの5月の朝に地域事務局が献堂されたことは、今後のアジアにおける教会の将来を象徴しているかのようである。

地域事務局は建築中の東京神殿とも至近距離にあり、アジア地域で急速に発展しているステーキ部および伝道部を実務面で支援し、奉仕する機関として、今後一層大きな役割を果たすことになるであろう。

アジア地域事務局

所在地・東京都港区南麻布5-10-30
電話03-440-2351(代表)

7階	地域担当教会幹部，地域管理監督
6階	財務部，購買部，会員記録統計部
5階	総合施設部（建築，施設管理，不動産）
4階	系図部図書館サービス（東京マイクロフィルムセンター）
3階	日本東京北伝道本部，系図部神殿サービスセンター
2階	会議室
1階	受付
地階	駐車場



きせき

シエリー・ジョンソン



マーラはねころんで、松のえだの
間から、わたのような雲を見あげま
した。

「マーラ、おいで帰る時間だよ。」
テントのくいをぬきながら、お父さ
んが呼びました。

「あと5分だけ、ねえ、おねがい！」

「ねえ、おねがい！」マーラはも
う一度たのみました。

「わかったよ。お父さんもそこに
行っていいかい。」

「ええ、来てもいいわ。」お父さん
もマーラのとなりにねころびました。

「何を見てるんだい。」

「みどり色の松と、青い空にうか
んでいる白い雲、それに鳴きながら
とんでいる小鳥。」

「きせきだね。」

「きせきって、なに？」

「そうだね、まわりを見てごらん。

べつべつのものがひとつになって、
大きな世界をつくっているだろう。」

マーラは、青い空にうかんだ白い
船のような雲をみながら考えました。

「たしかにきせきだわ。ほんとう
にすばらしいきせき。」

「世界中で一番すばらしいきせき
ってなんだと思う？」お父さんはた

ずねました。

「空でしょう、とても広くて、い
つもすがたをかえているわ。きょう
は青いけれども、白や灰色の日だっ
てあるでしょう。雪や雨をふらせる
こともあるし、夜には星が光るから。」

「だけど、いちばんすばらしい天
のお父さまのきせきかな？」

「わからない。」

「それじゃあ、荷づくりをしなが
ら考えて、答えがわかったらまた話
そう。」

家についてからも、マーラはお父
さんと話したことをわすれませんでした。
毎日、学校の行き帰りにきせ
きをさがしました。どれもこれもき
せきのように思えます。でもいちば
んすばらしいきせきを見つけること
はできませんでした。

ある日、マーラは木の葉が赤く色
づいての気づきました。マー
ラは大いそぎで家へかけて帰しまし
た。

「お母さん、お母さん。いちばん
すばらしいきせきがなんだかわかつ
た。お父さんはどこ。」マーラは台所
にとびこむと大声で叫びました。

「うら庭ですよ。」お母さんが答え

ました。

「3週間もさがして、やっとわかったの。お父さんに話してくる。」

「いちばんすばらしいきせきを見つけたの。」マーラは、お父さんにいきなり言いました。

「それは季節でしょう。木の葉の色が変わると雪がふり、それから少したつとまたみんな生きかえる。それが、いちばんすばらしいきせきで

しょう？」

お父さんは、にっこりほほえみました。

「すばらしいきせきだね。でも、もっとすばらしいきせきがあると思うよ。」

「だって、きせきが多すぎるわ。」
マーラは言いました。

「もっとさがしてごらん。かならずわかるから。」

マーラは前よりも、いっしょうけ



んめいにさがしました。空や季節よりもすばらしいきせきがなんなのかし知りたくてたまりませんでした。

「じゃましないで、スノーイ。」マーラは足にまつわりつくねこに言いました。

「わたしは、いちばんすばらしいきせきをさがしているの。」そのとき、マーラはスノーイがなにかを教えようとしていることに気づきました。そこでスノーイのあとについて行きました。

「まあ、スノーイ。子ねこを生んだのね。5匹の子ねこ。みんなスノーイにそっくりよ。」

ちょうどその時、お父さんが家から出て来ました。「お父さん、見て。これがきせきでしょう。」

お父さんは、かがみこんで、子ねこを見つめました。「生まれることもすばらしいきせきだね。でも、もっとすばらしいものがあるんだよ。」

「生まれることよりもすばらしいきせきがあるの？ 弟のジェイソンが生まれたときのことを、わたしおぼえているわ。それまでいなかったジェイソンが、つぎの日にはいたでしょう。」

「そう。たしかにそうだね。でも、それだけではない。もっとすばらしいことがあるんだ。」

そのとき、とつぜんマーラは「わかった」と叫びました。

「生まれるだけでなく、永遠に生きることでしょ？」

「その通りだ。いちばんすばらしいきせきがわかったね。」

マーラのひとみはキラキラかがやきました。「わたしたちは、天のお父さまの子どもでしょう。」

「それだよ。」お父さんはマーラをだきよせて言いました。「マーラとジェイソンがわたしたちの子どもであるように、わたしたちはみんな神さまの子どもなんだ。お父さんやお母さんと住んでいるように、マーラはかつて神さまのそばにいたんだよ。そして、わたしたちはもう一度神さまのもとで、みんないっしょに生活できる。これがいちばんすばらしいきせきだよ。」

マーラはとてもしあわせでした。マーラは今までいちばんすばらしいきせきをさがすことにむ中でしたが、今は、はじめからそれを知っていたようなふしぎな気持ちがあります。

世界の 子供たちの 証

わたしはジェンマ・サンネ・ダビソンです。イギリスのサリー州ミツ
チャムに住んでいます。わたしのお母さんは、わたしが4さいのとき教
会に入りました。わたしは8さいのたんじょう日にバプテスマを受けま
した。わたしたちは、古い家で教会の集会を開きます。わたしは物語を
書いたり、ピアノをひくのが好きです。わたしは友だちのゲイノーを初
等協会に連れて行きました。ゲイノーは、もうすぐバプテスマを受けま
す。今わたしは、ほかの友だちを初等協会にさそっています。その友だ
ちも教会に入ってほしいと思います。

……ジェンマ・サンネ・ダビソン（イギリス、ミツチャム）

ぼくは証します。末日聖徒イエス・キリスト教会は、イエス・キリス
トの本当の教会です。そのような教会の会員であることをぼくは喜んで
います。

……リー・ヤング・エン（韓国、ソウル）

わたしは家族といっしょに地域大会に行きました。わたしたちはハミ
ルトンで予言者にお会いしました。大会が始まる前は、とても悪い天気
でした。でもわたしは天気になると思っていました。天のお父さまは大
会が無事に開けるようのでんでいらっしゃるからです。

……ジャンタ・スカーコビック（ニュージーランド、ポリルア）

わたしは、お祈りのしかたを教えてくれたお父さんとお母さんに感謝
 しています。私はお祈りによって、天のお父さまと話すことができるこ
 とを知ったからです。

……アミイ・アロフィポ（西サモア、アピア）

ぼくは夏休みにおじいさんのところへ行き、山に登りました。帰る途
 中道に迷ってしまいました。ぼくはとてもおそろしくなりましたが、そ
 のとき初等協会で教わったお祈りのことを思い出しました。祈り終わっ
 て目を開けると、目の前に小みちがありました。

……藤原則之（日本、富山支部）

女の子はあたたかい水の中に入って行きました。人々はじっとその子
 を見えています。女の子は今からすばらしいことがおこることを知ってい
 ました。長老のうでをつかむと、女の子は水の中へ沈められました。ま
 るであわの中のように感じました。それからまた、水の中から出て
 きました。女の子は洋服を着がえ、かみをときました。その女の子と
 は、私のことです。

……ジジ・ミード（カナダ、アルバータ、カルガリー）

ぼくは初等協会の先生から友だちを連れてくるように言われました。
 ぼくはそのことをお母さんに話し、近所の子供たちをさそうことにしま
 した。マークのお母さんは、マークにいつでも初等協会に行つてよいと
 言いました。天のお父さまは初等協会につれていく友だちを見つけるこ
 とができるようにぼくを助けて下さり、ぼくたち家族はとてもしあわせ
 です。

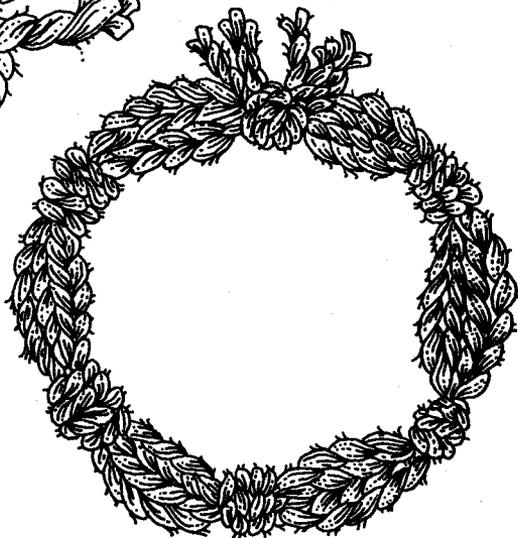
……ジオーグ・ボン・オールメン（スイス、バセル）

ぼくは先生と学校の友だちに教会の教えについて話すことができました。
 た。ぼくは初等協会や日曜学校でそのことを勉強したので、そうするこ
 とができるようになったのです。

……ルーカス・メトラー（スイス）

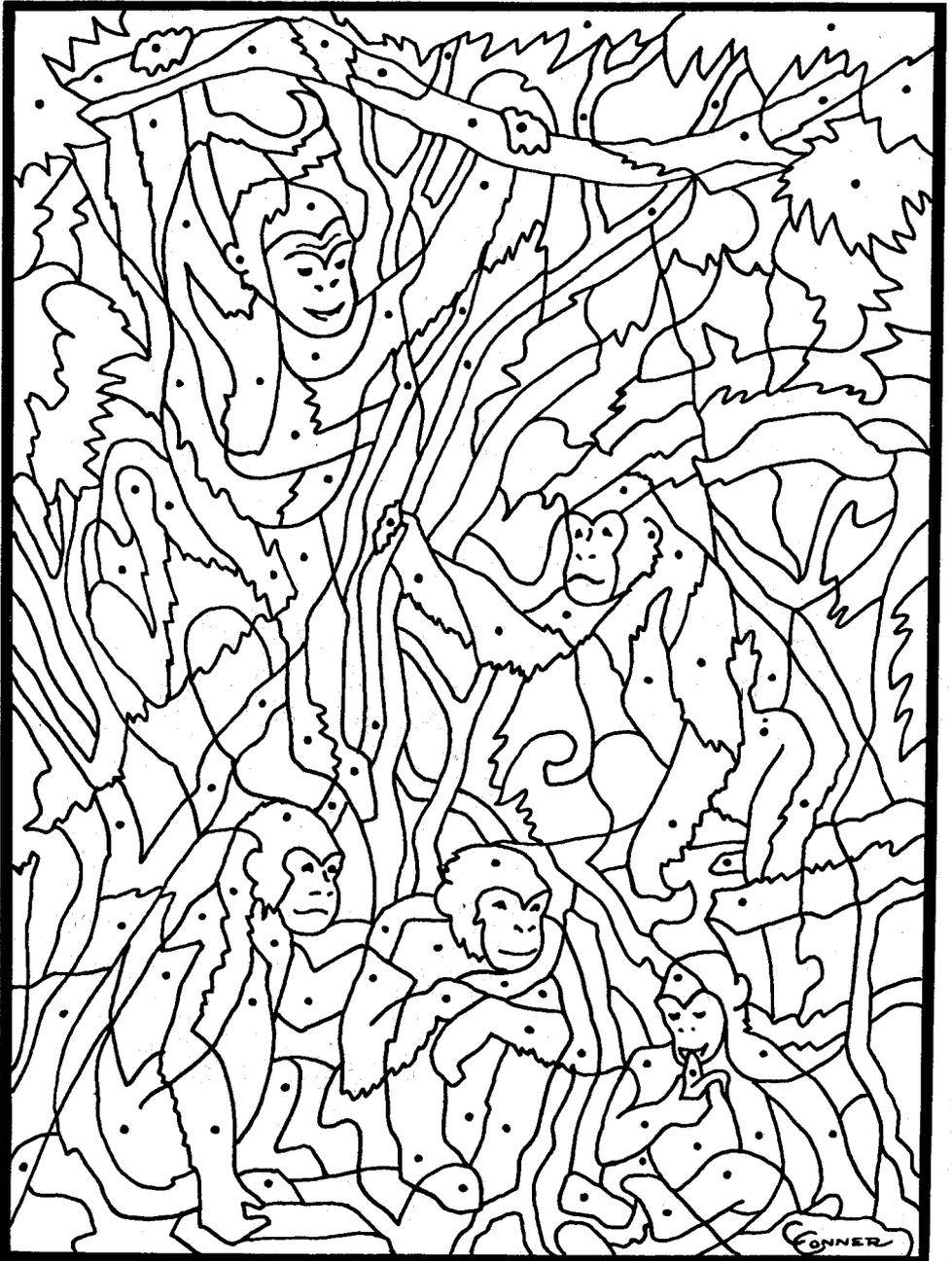


ひとえむすび スレスレット



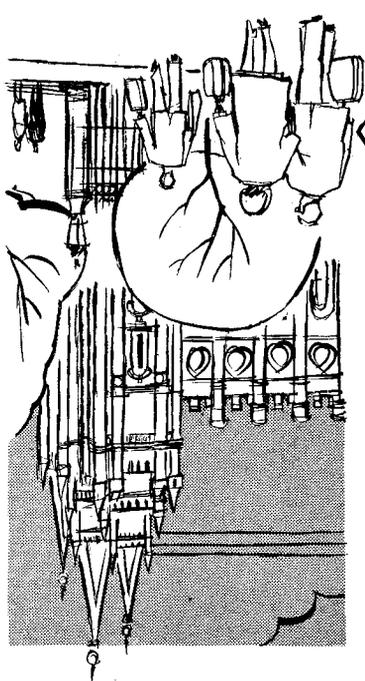
すてきなブレスレットをつくり
ましょう。まず、40センチほどの
ながさのふといひもを4本^{ほん}ようい
して、ながさをそろえます。つぎ
に、4本^{ほん}のひもをそろえて、いっ
ぽうのはしをかたんなひとえむ
すびにします。そのむすび^めから
4センチごとにひとつずつひとえ
むすびして、ぜんぶで5つのむす
び^めをつくります。それができた

ら、むすび^めのできたひもを、あ
なたの手がとおるくらいの^{おお}大き
さの輪^わにして、べつのひもではしを
くくります。よぶんなところはき
りすてましょう。これでブレスレ
ットはできあがりです。



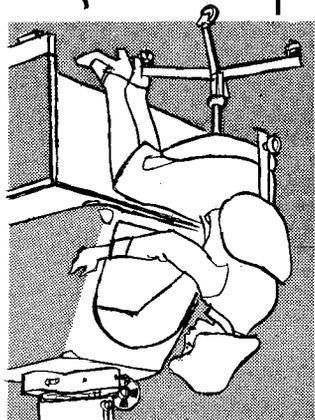
●しるしのところをぬりつぶしてみましょう。
ジャングルのなかまがあらわれますよ。

キャロル・コナー



80人の
エントウメント

80人の名前
=
4時間
+
ひり



て系図部に提出するよう全教員に勧める、
4代家族の記録プログラムも続行されること
になっている。
スベンサー・W・キンホール大管長は、4
月の総大会で、これら2つのプログラムの重

現 在、全世界の神殿地区で、神殿の儀式を
施すために記録の中から人名を抄出する
新しいプログラムが早急に推し進められよう
としている。また、この抄出プログラムと並
行して、4代の系図表と家族の記録を完成し

チャーチ・ニューズ記者
リンネ・ホルスタイン

新しい系図プログラム

要性を次のように語った。「今後、2つの大切な系図プログラムが強調されることになりま
す。……

私たちは4代家族の記録プログラムの重要性をここで再び強調し、このプログラムに関する責任を個人と家族の双肩に直接課したい
と思います。また、できれば、4代以上さかのぼって系図表を作成するようにします。

次に、系図記録から人名を抄出するプログラムが、世界的に進められることになってい
ます。教会員は2マイル行く精神をもって、この抄出プログラムに従事し、奉仕するよう
にして下さい。このプログラムは、地元の神
権指導者が管理し、運営します。」

キンボール大管長はまた、すべての教会員
に、個人の歴史を書き、家族の組織化を行な
うように勧めている。

また、この人名抄出プログラムは、昨年ユ
タ州セントジョージで試験的に実施された。
そして現在、全ステーク部への導入が進めら
れている。教会系図部の発表によると、この
プログラムは今後全世界の多くのステーク部
で実施され、全神殿地区の会員がそれぞれの
神殿で儀式を行なうに必要な名前を提出でき
るようにするということである。

例えば、セントジョージ神殿地区内のステ
ーク部で、1年間に25万人の死者のエンダウ
メントを行なうとする。そのためには、4代
家族の記録プログラムと人名抄出プログラムの
両方で、1年間に25万人の名前の提出がな
ければならない。

また、七十人第一定員会会長であり、教会
系図部の管理部長を務めるJ・トーマス・フ
ァイアンズ長老が語っているように、すべて
の末日聖徒の家族は、正確な4代の系図表と

家族の記録を提出する責任を負っている。系
図表を提出する会員は、それが正確であるか
どうか調べ、また全員の神殿儀式が終わって
いるかどうか確認すべきである。そして、儀
式がまだ終わっていなければ、その名前を規
定の記入フォームに記載して系図部に提出する。

儀式を終えた人の名前は、エンダウメント
や結び固めの執行された日付と共に、「コンピ
ューター・ファイル索引(CFI)」に記録され
ることになっている。

ファイアンズ長老は次のように語っている。
「4代の系図表を完成した人は、一応自分の
義務を果たしたことになります。しかし、で
きればさらにさかのぼって家系をたどるとよ
いでしょう。」

4代以上さかのぼって探求することは、家
族史を作成する上でも、先祖を見いだす上でも
非常に役立つであろう。

また、人名抄出プログラムは記録の残って
いるすべての先祖に神殿の祝福をもたらす手
段として有効であると、ファイアンズ長老は
語る。

「マイクロフィルムに収められたおびた
だしい記録から、死者の名前とその他関連する
系図資料を抄出しようというのがこのプロ
グラムです。」

この人名抄出プログラムは今後世界各地で
実施され、おびただしい数の名前が引き出さ
れることになる。そして、4代以上さかのぼ
って先祖の名前を知る手段として利用される
ことだろう。

また、ファイアンズ長老は次のようにも語
っている。

「このプログラムは、探求の重複と、神殿
儀式の重複を避けるのに役立つでしょう。」

すべての人は同じ先祖を持ち、親族関係にあります。この人名抄出プログラムは、会員が一致協力して死者の贖いという偉大な業に携わることができるように組織的な方法を提供するものです。」

この抄出プログラムに携わる人は、マイクロフィルムを調べ、自分の家系に属する人の名前だけでなく、マイクロフィルムに出ている名前をすべて抄出することになる。自分の先祖にとどまらず、多くの人々の名前を記録から取り出すのである。このように、互いに協力し合って系図の仕事を進めるのが、このプログラムの特徴である。

人名抄出プログラムを実施するステーキ部は、ソルトレーク・シティーの系図部または地元の系図機関からフィルムを入手する。

多くのステーキ部で、今年このプログラムが開始され、エンダウメントの儀式を施す死者の名前が抄出プログラムによって提供されることになる。

また、人名抄出プログラムを実施するにあたっては、そのための設備と、この仕事をこなす技術を持った多くの人々が必要である。従って、当初は系図図書館分館のある地域で実施されることになる。しかし「やがて、すべての図書館で行なわれることになるでしょう」と、系図部のヒュージ兄弟は語った。

地元の指導者の判断により、幾つかのステーキ部が協力してプログラムを実施することも可能である。

また、総大会時に地区代表全員に、このプログラムの開始方法について指導が与えられている。従って、このプログラムを開始しようとするステーキ部は、地区代表を通して指示を受ける。

何人の人名抄出係を召すかは、ステーキ部長が決める。また、神権指導者は、このプログラムを開始する前に、系図部とすべての必要な調整を図るようにしなければならない。

このプログラムによって来年度何人の名前を抄出するか、今から計画するのは早過ぎるかもしれない。しかし、神殿儀式に必要な名前の抄出を順調に行なうためには、今から計画することが必要である。

「昨年度、マイクロフィルムに収めた名前は1億以上にのぼります。けれども、その内でエンダウメントの儀式が執行されたのは、355万5千人に過ぎません。記録にはたくさん名前がありますが、名前を抄出し、必要な手続きを取るまでは儀式が施せないのです。ですから、私たちはたくさん名前を記録から抄出しなければなりません。」ヒュージ兄弟はこのように語った。

人名抄出プログラムを開始して、各ステーキ部の系図宣教師たちが、神殿儀式のために必要な名前を記録から取り出す作業を迅速に行なうならば、記録上の名前は順調に消化されるであろう。

この新しいプログラムによると、ステーキ部系図宣教師は、1時間あたり平均20人、4時間にして80人の名前を抄出することができる。そうすると、80名のエンダウメントの儀式ができる。つまり、一人が4時間働けば、80人のために働く計算になる。

「これは非常に素晴らしいプログラムです。」ファイアンズ長老は語る。「系図と神殿のみ業が開始されて以来、何度かプログラムに大きな変更が加えられてきましたが、今回の変更も極めて大きなものです。」

今も奇跡が？

毎月証会で述べられている奇跡

ジェイ・A・ペリー

この神権時代に紅海がふたつに分けられたという話はない。少ないパンと魚で5千人が満腹したという話も聞かない。しかし、ウィルフォード・ウッドラフの伝道に因って何千人ものイギリス人が教会に改宗している。また、御父と御子がニューヨーク州の森を訪れたもうた。

神は必要な時に、その時代に即した大きな奇跡を現わされる。

それとは別に、ひそかで目立たない個人やほんの数人だけに影響を及ぼす聖霊の働きが、どの神権時代にも共通して存在する。どの時代の聖徒たちも、みたまによる特別な経験を得ている。癒しや予言、祈りに対する答え、みたまによる識別、生活の転換、夢など、これは実に奇跡である。今から1500年も昔にモロナイがこう語ったように。「私は奇跡を行いたもう神をあなたたちに教えよう。……

イエス・キリストが大きな奇跡を数多く行いたまわなかったと言える者が一人でもあろうか。使徒たちも大きな奇跡を数多く行った。

もしもその時神が奇跡を行いたもうたならば、どうして神が変わることなしに奇跡を行うことを止めたもうであろうか。よく言うておく。神は変りたもうことはない。変りたもうことがあれば、神は神である資格がなくなるけれども、神は神である資格を失わずに現に

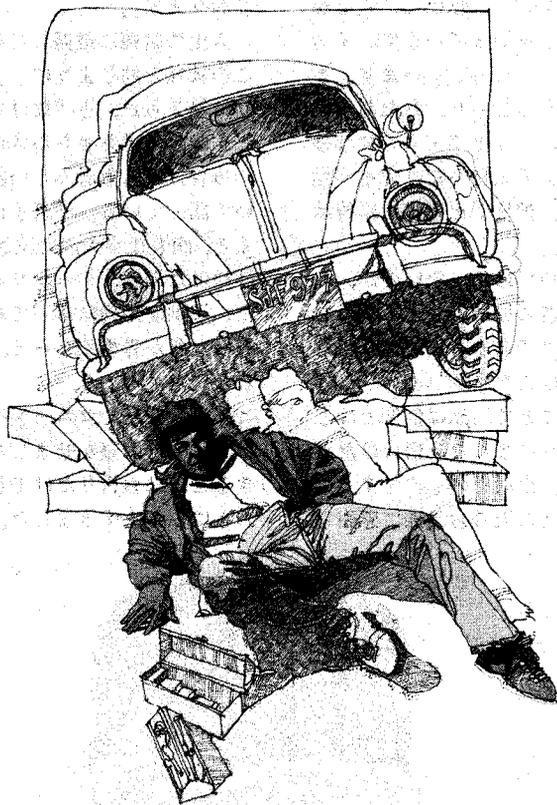
奇跡を行う神にまします。」(モルモン9:11, 18-19)

現在の奇跡はそのほとんどが個人に関連したもので、その人の胸にしまわれるか、せいぜい家族が理解してくれる少数の友人に話すくらいである。しかし時には、感謝と信仰の表現として、断食証会でそれが話されることがある。

証会ではたいていそのような話が幾つか語られる。その話を集めれば、現代の教会における奇跡が感動的に描き出されることだろう。実際、みたまによる経験は現在の聖徒たちにとって決して珍しいことではなく、その恵みにあずからないのは「無信仰に陥って正しい道を離れ、その信頼する神を知らなく」(モルモン9:20)になった人々だけである。

私たちは奇跡の話を知ると信仰が強められる。奇跡は、神が私たちを愛し、私たちを心にかけて、必要な時直接に私たちの生活に影響を及ぼして下さることを証するものである。

一番よく見られる奇跡は、靈感であろう。先日ある若い兄弟が、靈感によって家族が祝福された経験を証していた。「父と祖父と3人でイエローストーン公園に行った帰りに、ガソリンスタンドに立ち寄ってひと休みしました。祖父はかなりの年で目が悪く、ガソリンスタンドから出てくる時にガラス戸にぶつか



ってしまいました。開いていると思ったのです。そのため腕を深く切りました。そこで私たちは止血をしながら病院に急ぎました。

病院に着くと、父から、だれか末日聖徒の長老がいなかどうか看護婦に聞いてみるように言われました。だれかに手伝ってもらって祖父に祝福をしたかったのです。けれども看護婦は、末日聖徒はいないという返事でした。その時ひとりの人が近づいてきて、『私は大祭司です。お手伝いできます』と言うのです。

その方は父と一緒に祝福し、それを終わるとすぐに帰ろうとしました。そこで私はその方を引き止め、『だれかをお見舞いにいらっしやったのでしょうか。私たちのためにすみませんでした』と言うと、その方はこう言いまし

た。

『いいえ、知っている人がいるわけじゃないんです。』

『じゃあ、どこにいらっしやるところだったのですか。』

『近くを車が通っていて、ここに来なければ、という気持ちが急にしたんですよ。』

また、ある祭司の話である。「私はきのう、外で車の修理をしていました。すると突然『車の下から出なさい』と言われたような気がしたので、車の下からはい出ました。その途端に、車体を支えていた台がはずれて車が落ちてきたんです。そのままだったら下敷きになっていたと思います。私を見守って下さる天父に本当に感謝しています。』

またある人はこう語った。「私はこの教会が真実の教会であることを知っています。イエス・キリストは生きていらっしゃる。また、神様も生きていらっしゃる、私たちを愛して下さっています。ジョセフ・スミスは確かに予言者です。自分の気持ちだけでそう思うではありません。神様がそのように啓示して下さいましたのです。」

靈感の奇跡に似ていて珍しくないのが、みたまの助けにより福音の原則に対する新たな理解と洞察を得ることである。癌に冒された息子を持つある姉妹はこう証している。「このたび幼いトーマスのことで、私は信仰とはどんなものかよく教えられました。信仰はただ感じるものではなく、生活そのものです。このことを教えて下さった天のお父様に感謝し

ております。」

人生の試練に遭遇してみたまの力を感じたこの姉妹と同じように、多くの聖徒たちが祈りに答えられ、主の助けを受けている。

1歳半のよちよち歩きの子供を持つひとりの母親は、ある恐ろしい経験をしたことについて語っている。その子供は浴室に入っていくと、間もなく大声で泣き出した。「急いでかけつけた私は、すっかりあわててしまいました。子供が浴槽に落ちて頭をぶつけたのです。打った所が青黒くなって、はれ上がってきました。

私は半狂乱でロニーを抱き上げ、寝室に運び、ベッドに寝かせました。その時の私にできることはお祈りだけでした。私はベッドのわきにひざまずきました。そして祈り始める



と間もなく、心がとても穏やかになりました。

そうして祈り終わると、ロニーの頭のはれはひけ、患部の変色もほとんど直っていました。

主は癒し以外にも、私たちの祈りに奇跡をもって答えて下さる。例えば、主は私たちに祝福を与えて下さったと思うことがしばしばある。ある姉妹は証会でこのように話した。

「ロジャーを伝道に送り出すためには、生活を変えて伝道資金を準備しなければだめだと思いました。でも、腰を落ち着けて予算を立て直してみると、生活必需品さえままならないような状態でした。私たちは心配してそのことをお祈りしました。主を信頼して、何としてでもロジャーに送金するつもりでしたが、どんな方法でしたらよいかがわからなかったのです。

ところが、ロジャーが発する前日に、主人が上役から部屋に呼ばれました。給料を上げて下さるという話で、紙に昇給分の金額を書いて渡されましたが、驚いたことに、その額はロジャーの伝道の経費と丁度同じでした。」

天父はいろいろな方法で私たちを助けて下さる。イエスは言われた。「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち彼らはわたしの名で……病人に手をかけば、いやされる。」(マルコ16:17-18)回復されたこの教会に特に著しい奇跡は病人の癒しで、断食証会ではよくその証を聞く。

ある年輩の兄弟がこう語った。「私は気腫の持病がひどくて、半丁も歩くと息切れがする状態でした。ところが数ヵ月前に、神殿の結び固め執行者に召されたのです。私は非常に心配でした。神殿では階段を上らなければならないのに、それができなかったからです。しかしその責任に任命された時、その仕事を果たすに必要な健康も祝福していただきました。兄弟姉妹、その祝福が本当になったのです。しかも神殿の中だけではありません。きのうはテニスの試合をしましたが、終わってから息切れさえしませんでした。すっかり健

康になりました。」

主は不思議な方法で聖徒たちに教えと慰めを与えて下さる。夫の横暴な態度が原因で夫婦仲がよくなかったひとりの姉妹は、ある夢を見て自分のかたくなな気持ちをほぐされた。「もの柔らかでやさしげな女の人がやってきて、愛し続け、辛抱しなさい、アーノルドは良い人です、今に変わりますよと言うのです。私はその夢が忘れられず、何日も思い出していました。あの女の人はだれかしら、なぜあのようなことを言ったのかしらと不思議でした。ところがそれから間もないある日、糸図の資料にするためにずっと前から頼んであったアーノルドの先祖の写真が届きました。その中にアーノルドのお母さんの写真がありました。アーノルドが7歳の時に亡くなったので、ほとんど記憶にないお母さんでした。でもお母さんの方はアーノルドをよく知っていたのです。夢に見た女の人は、そのお母さんだったのです。」

この夢のように、現世と来世を隔てる幕が時々引かれて、教会員が幕のかなたの人々と交わる祝福もある。「私の祖父は祖母と57年連れ添ったあと、他界しました。私は葬式のすぐ後に祖母を見舞った時、『おじいさんはおばあさんの所によく来ますか』と尋ねました。

すると祖母はにこやかに、「どうしてわかるの」と言うのです。祖父はよく祖母の所へ来るそうで、2日前の経験を私たちに話してくれました。祖母が祈りを終えてベッドに入り、祖父のことを考えていると、祖父がベッドのそばに現われました。その時祖母は祖父に、『私も連れて行って下さい』と言ったそうです。

でも祖父は首を横に振って寂しそうにはほえみながら、『まだだよ。ルビー』と言いました。祖父はそれから少し話をして去って行きました。

でも、それから間もなく祖母は祖父の所へ行くことになりました。祖母は病院に入院し、この世を去ったのです。祖母が亡くなったの

は悲しいことです。でも、愛する人の所へあんなに行きたがっていた祖母を無理に引き留めることはできませんでした。」

また、悔い改めは、救い主の贖罪によって可能になった奇跡である。ある青年がこう証した。「ぼくはいろいろなことで両親を悲しませたと思います。また自分自身も苦しむことになりました。罪悪は幸福を生じないということがわからなかったのです。高校卒業後、ぼくは家を出て、酒やタバコを始め、幻覚剤にも少し手を出しました。自分では満足だと考えていたのですが、今思うと、本当にみじめな姿だったと思います。」

そんなある時、ふと自分を振り返って考えました。「今のぼくを両親が見たらどうだろう。両親はどう思うだろう。」と。

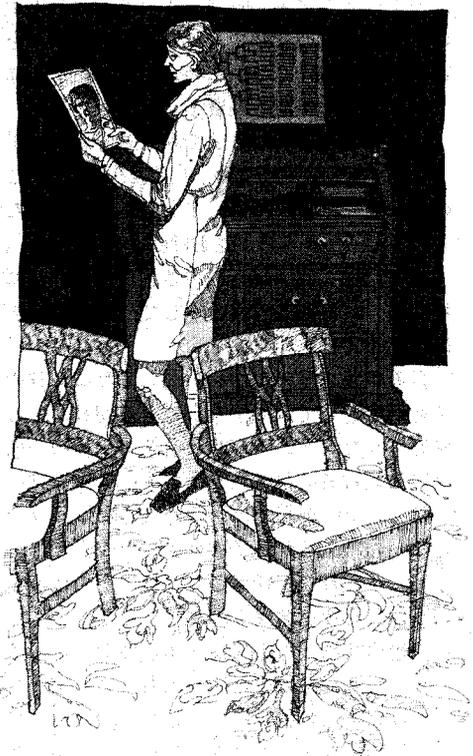
その時からぼくの生活は変わり始めました。自分は少しも幸せではないことを知ったのです。新しく良い友達と、理解ある監督と、聖霊の助けがなければ変われなかったと思います。私はそういう人々に助けられて悔い改めができました。今では、自分がどんなに不幸だったか、よくわかります。悔い改めと義しい生活が幸福をもたらすことを証します。主がいつもそばにいて、私たちに用意があるなら生活を変えるように助けて下さることを、私は自分の経験からよく知っています。」

私たちの教会は実に奇跡の教会である。断食証会の日曜日にそのしるしを見、聖徒たちの霊的な経験によって私たちの信仰が強められる。その上、心の中に数々の経験が蓄えられる。(ルカ2:19参照)

「私の愛する兄弟たちよ。……キリストが、……この世を去りたもうたからと言って奇蹟は果して止んだのであるか。」モルモンはこう問うてから、次のように自答している。「よく言うておく、そうではない。奇蹟は信仰によって行われ、……それであるから、もしこのようなものが終わってすでに無い時がくるならば、それは不信仰の結果であってすべては空しいから世の人はまことに禍である。」

私の愛する兄弟たちよ。私はあなたたちがこの恐ろしい有様にあるとは思わない。かえって、あなたたちの柔和である有様を見てあなたたちがキリストを信じていると思う。」(モロナイ7:27, 37, 39)

「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう」と救い主は言われたが、1970年代の、また他の時代の末日聖徒はその信仰の実をつけている。霊的な経験や奇跡が、毎月世界各地の教会の証会で語られているのである。実にそれは、主が末日の啓示の中で言われた通りである。「然り、その足シオンの地の上に立ち、わが福音に従い居る者は幸福なるかな。その者は……天より祝福をもて冠を受くべく、また誠に少からざる誠命とその時々に関する啓示とを与えらるるなり。」(教義と聖約59:3-4)



断食—— 喜びの賜

シェリル・コンディー・ケンプトン

断食は私にとって決して従いやすい福音の原則ではありません。けれども私は、定められた方法で断食をきちんと行なおうと1年前に、決心しました。心を新たにしたい私は、なんとかして断食をもっと意義あるものにしようと思いました。もっと主に受け入れられる、そして自分の霊性をもっと高めるものになりたいと思ったのです。

断食日曜日がやってきました。私は土曜日の午後から日曜日の午後の断食証会が終わるまで断食しようと思いましたが、土曜日の夕方に軽食が出る会合に出席する予定がありました。そこで、計画を変えて、土曜日の夜から日曜日の夜までにしました。

翌朝になりました。あわただしい雰囲気の中で3人の小さい子供たちに食事をさせ、日曜学校の支度をさせているうちに、私はつい断食のことを忘れて、指先についたはちみつをなめ、パンの残りを口に運んでしまいました。それに気づいた時、私はがっかりし、その日の断食はあきらめてしまいました。

断食をしなかった償いとしてその週のうちにいつか断食をしようと思いましたが、結局その週はおろか、月内にも断食はできませんでした。そのうち、次の断食日曜日が近づいてきました。

この時はいつもと少し違っていました。ス

ペンサー・W・キンボール大管長の要請で、一部の地方の異常寒波や豪雪、あるいはかんばつなどの天候のことをお祈りする断食日だったのです。自分も数百万の教会員と一緒に神の予言者の指示に従って断食をしているのだと考えると、心が躍るようで、断食をする励みになりました。

ところが、ただ24時間飲食物を取らなかったということだけで、心の満足は得られませんでした。いつもの日曜日と大して変わらなかったからです。断食が大切ならばいつもと違ってよいはずなのだと思います。でも断食が大切なことはわかっていますから、きっと自分の断食の仕方が間違っているに違いないという結論を下しました。

そこで私は、断食の原則と方法について聖典を勉強することにしました。

それから、聖典を読むのと並行して、現代の予言者たちから出されている断食の指示を読みました。はっきりと言われているのは、2食続けて飲食物を取らず、断食証会に出席し、惜しみなく断食献金を納めるのが断食日を正しく守ることだということでした。

そのことを知って、正しく断食したいという気持ちを強くした私は、学んだ言葉を試してみる用意ができました。私は断食の律法を理解し、この律法を文字通り守れるというこ

とを知っていました。しかし、本当に私たちの生活を変えるのは律法精神です。私は断食の精神を身につけるために、次の5つのことに特に気を配ることにしました。

1. 神と隣人に対する愛の精神

最も大切なこの目標を達成するためには、いつも注意を払い、努力する必要があります。時によっては人を愛することは容易ではありません。そればかりでなく、愛そうという気持ちがなかなか感じられないことさえあります。また、神に対する自分の愛を考えると、自分の愛が貧弱で乏しいことを感じて悩むばかりです。

2. 犠牲と奉仕の精神

断食献金を納めることはこの精神のひとつの表われです。自分の証を人々に話すのもそうです。自分が受けている豊かな祝福を、機会を見つけて周囲の人々に分かちあうことが大切です。私は、本当の犠牲とはどういうものかわかっていないと感じることが時々あります。

3. 聖徒間の兄弟愛とフェローシップの精神

断食した時に、教会員との一致を感じ、その一致によって力づけられることは大きな喜びです。

4. 神との交わりの精神

月に1日、気を散らされずに(ただし、3人の子供は別です。まだ小さくて私に協力できません)、「ひたすら神の栄光を仰ぎ見て」、神の宮なる体を清め、心を清める良い機会が与えられています。

5. 自制の精神

私にとって断食の実践は、自分の心を主のみこころに従わせて霊の力を強め、自分の体を訓練し、主のみ旨に添わない行ないと思いを悔い改めようとする一種の謙遜さの表明です。

私はこれらのことをよく考えて断食しました。最初、それまで自分の悩みの種となっていたある誘惑について、それに耐えられるように断食し祈りました。その結果はまるで奇跡でした。誘惑に耐えられただけでなく、そ

れが誘惑でなくなってしまったのです。罪を犯さずにすんだ上に、そのようなことをする気持ちが消えたのでした。そのように、祝福は直ちに私に与えられたのでした。

それから1ヵ月と経たない内に、私は自分の成長のためにまた断食をしなければと考えました。その時は、それまで決心しかねていたある事柄について断食し祈りました。どちらを取るか、優劣をつけられず、何週間も迷っていた問題でした。ところが断食をして祈った後、自分のなすべきことが急にわかって、それが最善の選択かどうかと悩むことがなくなったのです。

私は断食をした後、どんな食物が自分によいかははっきりとわかりました。何だか自分の体が前より聖くなったように思われて、体に悪い物や不要な物は食べたくないという気持ちになりました。断食のおかげで、私たちの体の栄養になる食べ物は何で、健康を損うものが何かということがわかったような気がします。

頭がすっきりして回転が早くなったようにも思いました。神殿に行く時には、ひとつの目的に集中する力が増しました。断食をするとう体力が衰えるように感じますが、そのあとで能率よく仕事ができ、持久力が増したように思います。

また、夫や子供たちに対してやさしい気持ちになり、愛と思いやりが増すのを感じました。聖餐会で目に涙することが多くなり、聖餐会を感謝する気持ちが強くなりました。会そのものは前と違わないと思いますが、私の心が霊的な感受性を増したせいでしょう。

断食をした結果受けたもうひとつの大切な祝福は、悪い力や誘惑を感知する能力が増し、無意識の内にそのような誘惑を避けるようになったことです。

主が望んでおられるような断食をしようと努力を始めてから、断食の助けになることを幾つか発見しました。その内の幾つかを次にあげてみます。

1. 家族と一緒に断食する

神権者の模範から力と励ましを得て、互いに支え合って下さい。飲食物を断つことが無理な年齢の子供もほかのことで参加できます。例えば、祈り、聖典を読み、歌い、祝福を数えあげ、人々に奉仕することができます。

2. 人々に奉仕し、犠牲を払う具体的な計画を立てる

いつも惜しみなく断食献金を納め、また主のみこころにかなう奉仕としてほかにどのようなものがあるかを主に伺う。

3. よく準備を整え、体を動かすことを最小限にとどめる。

そのために私は、子供の服や食べ物を前もって用意しています。また、土曜日の断食を始める前に、日曜日にふさわしい生活のできる準備をするように努めています。

4. よく準備を整え、いらだつことのないようにしておく。

急がせなくてよいように、教会の集会には充分な時間の余裕をもって出かけます。

5. 熱心に祈る時間を持つ

3人の小さな子供がいて何かと気を配らなければなりません。時に応じて、家族全員で祈ったり、子供が寝ている間に夫とふたりで祈ったり、またひとりが子供を見ている間にもうひとりが祈ったりします。個人の祈りに心を打ち込める一番良い時間は、私の場合は夜中です。

6. 特別な目的や祝福のために断食と祈りを行なう

個人的なこと、家族の問題、他の人のため、また天候などのように全教会や国全体に関係することなど様々です。

7. 罪を悔い改める

どうすれば変わるか、靈感と力を求めます。また、償いをして、相手に赦してもらうための方法を考えます。

8. 聖典を読み、研究し、考える

まだ理解できていないことを知るように努めます。夫にも手伝ってもらって、疑問な点

をはっきりさせます。聖典を通して読むのもよいですが、テーマを決めてそれについて読むのもよいと思います。子供が聖典を理解し、大好きになるように導く方法を考えます。

9. 神をほめたたえる

祝福を神に感謝します。賛美の歌を歌い、神の導きをいただいていることを喜び、人々に神が愛に満ちた御方であることを証します。

10. 障害を避ける

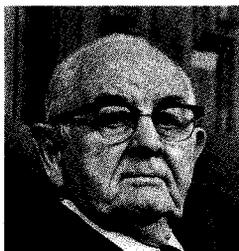
土曜日の晩の結婚披露宴、パーティー、夕食会、スポーツ、日曜日の食事会などは、断食や霊的な交わりに支障を来すかもしれません。

11. 自分の経験を日記に記す

神への賛美、悔い改めたこと、変えようと思うこと、聖典を読んだ感想、奉仕計画、毎月の断食の目的、自分の証など。このようなことをいつも日記に書いていけば、自分の証を強く保ち、自分が変わる動機づけとなり、子供や孫に靈感を与える力強い手段となります。自分に起きた奇跡はすぐに記憶から消えてゆきませんが、日記はその出来事をあざやかによみがえらせ、奇跡の日々である永遠の生命を渴望する気持ちを抱かせてくれます。

私の断食はまだ「喜びと祈り」であると言える程完全なものではありませんが、1年前よりはずっと理想に近づいたと思います。神が生きておられて、私たちが神の子供で、神は私たちが幸せになるように望んでおられることを知るの大きな喜びです。そして今、私はその喜びを得る大切なひとつの要素が断食であると確信しています。あらゆる弱さをなくし、すべての才能を伸ばし、完全な者となって天父に再びまみえるためには、このような断食をすることが本当に大切だと思うのです。神のみもとに帰る道を見いだす強力なてだてとして、断食を啓示して下さった神に心から感謝いたします。

教会の 活力の基



大管長
スペンサー・W・キンボール

証は、私たち十二使徒だけが述べるものではない。これはすべての教会員に大切なものである。……私は初等協会や日曜学校に出席していた小さい頃に証を述べたことを今も覚えている。証を述べることは基本的なことであり、極めて重要である。……小さい子供が証を述べるなどばかばかしい、子供に物事の真偽などわかるはずがないと言う人々が

いる。確かに子供の知識には限りがある。しかし子供にも感情はある。証は単なる事実の集積ではなく、感情である。証は心の内から生じる。そしてそれは一番大切なものである。……教会員はだれでも証を持っている。伝道部長たちは集まればそれぞれに証を述べ合う。また、どこでどんなに少人数であって、教会員が集まれば、くつろいだ場であれ公式の場



であれ互いに証の交換がある。

私たち十二使徒も気楽に証を述べる。私は十二使徒に召されて18年半になるが、その間に4回ずつ証会があった。早朝に私たち十二使徒は教会本部からそう遠くない神殿へ行き、……4階の部屋に集まる。この部屋には古い皮張りの椅子が12脚ある。非常に古い椅子である。少なくとも半世紀は使用されてきたことであろう。皮がすり減っているが、まだまだ座り心地の良い椅子で、それが半円形に並べられている。そして、傍らに書記がいる。スミス会長が片端に着席し、一番新しい十二使徒が反対側の端に座る。つまり、12人が馬蹄形に着席する。それから歌を歌う。伴奏は一兄弟が行なう。彼が指揮をする時は私がオルガンを弾く。足踏み式の小さなオルガンである。私たちは主のみたまを求めて心から熱心に祈り、それから前回の集会の議事録の発表を聞く。議事録を読み上げるのに15分から20分かかるが……聞いていて胸が躍るようである。3ヵ月前に聞いた兄弟たちの証をもう一度聞くのである。

それから十二使徒会長のスミス長老が、たいていは起立して、聖典を片手に私たちに聖典に基づいた話をする。それは丁度エマオへ向かう道でふたりの弟子に主が聖書を説き明かされた情景に非常によく似ていると思う。…

私たちは断食をしてその証会に出席し、ふたりの使徒によって祝福されたパンと水を受ける。それから証が始まる。証を述べるのは私たち12名だけだが、3時間から4時間かかる。私がこのことをお話するのは、証が土台であり、教会活動の重要な要素であることを知っていただきたいからである。十二使徒たちが互いに証を述べ合い、主への感謝を語る

ことが必要であるとすれば、宣教師たちも、励ましと靈感と力を得て炎を燃やし続けるために証を述べることが必要なのではないだろうか。それから私たち十二使徒はまた歌を歌い、祈りを捧げ、おのおの仕事に戻る。

また、半年ごとに開かれる総大会の前の木曜日に証会が行なわれる。神殿内の大管長会と十二使徒会の部屋で開かれるその会には、教会幹部が全員出席する。……正面に大管長の席がある。この席に座るのは主の予言者だけである。大管長不在の時には副管長が司会をする。しかし、副管長は大管長の席ではなく自分の席に座って司会する……。

ふたりの兄弟、普通は十二使徒の兄弟たちが聖餐を執行する。(一同は断食をしている。)それから証会があり、大祝福師、管理監督会から1名、七十人から1名、十二使徒補助から1名、十二使徒から1名ないし数名、大管長会の全員が証を述べる。全員の素晴らしい証をしめくくるように最後に主の予言者の証を聞くのは栄えある経験である。予言者がその場に立って、「私はこれが真実であることを知っています。主は祈りに答えて下さいます。主は私たちにみ旨とみこころを啓示して下さい。』と語る言葉を、私は決して忘れない。

私がお話するわけは、証を述べるのが宣教師だけにとどまらない大切な事柄であるということを知っていただきたいためである。これは教会のプログラムである。証には力がある。……これはこの組織と教会の活力の基である。」(The Berlin Spirit「ザ・ベルリン・スピリット」1962年1月号)

(キンボール大管長が十二使徒評議員会会長であった当時、証を述べることの大切さについて、宣教師たちに語った話からの抜粋)

クリスチャンの改宗

ゴードン・アービング編

人を福音に改宗させるのは、必ずしも宣教師のレッスンばかりではない。クリスチャン・ヌーツン兄弟の場合がその好例である。ちょっとした思いやりの積み重ねも人を改宗に導く。1856年にノルウェーで生まれたクリスチャンが14歳の時、彼の叔父が宣教師としてユタからノルウェーに帰って来た。そしてクリスチャンの家族は彼から教えを聞き、バプテスマを受けた。しかし国教の教育を受けていたクリスチャンは、ひとり違っていた。彼は家族が教会に入った時に、非常に冷ややかな気持ちでいた。次の抜粋は、教会歴史部記録保管庫の資料にある彼の晩年の記録からの引用であるが、これから16歳間近のクリスチャン青年がどのような経験をしながら福音を受け入れる日に備えていたかがよくわかる。なお文章を読みやすくするために、クリスチャンの文と語法を少し変え、改宗の経験に関係のない箇所は省いた。



1870年、母の弟のモンス・アンダーセン叔父がモルモンの宣教師としてわが家を訪れてきた。彼はこの地に住む長老たちを伴い、わが家で集会を開いた。その結果、父と母が

教会に入った。それから間もなくして、家族は、ユタに移住することになった。しかし私は行きたくなかった。私は神学校に通っていて、学校で聖書のことをたくさん学んでい





た。ところが、長老たちは私の聖句の解釈が誤っているというのである。そのことに気分を害した私は、彼らの話に耳を傾ける代わりに、ますます反感を抱くようになった。

やがて両親が家を売ってユタに移住する時がやって来た。しかし私はそれに従わず、一緒に行こうとしなかった。そのような私の気持ちを知った両親は、説得にかかった。そうするとなおさら、私は片意地になった。家を売ってしまい、自分の住む所がなくなるといことがどんなことか、わからなかったのである。そうしている間に、わが家を買った家族が引っ越して来たため、私たちは一晚隣家にお世話になった。そこで私はやっと90マイル(約144キロ)ほど離れたノルウェーの首都クリスチャニア(オスロの旧名)まで一緒に行くことに同意した。このようにして1872年6月18日に、私たち家族は家をあとにしてユタへ向かった。

家族は6人であった。父と母、17歳の姉アグニーテ、15歳の私、12歳の弟マシアス、それに8歳の妹クリスチン。荷馬車をひいたひとりの人がやって来て、私たちの衣料と食料と寝具を入れた3つの箱を運んでくれた。中には大きな箱もあったが、彼はどうにか全部を馬車に積み込んだ。残る私たちは徒歩であった。けれども徒歩の旅はノルウェーではごく普通であった。イギリスの単位で7マイル(約11キロ)ほど行くと、メサ湖と呼ばれる内陸湖に着いた。そこで小型蒸気船に乗り込み、45マイル(約72キロ)ほど離れたエイボルという町へ向かった。ここはノルウェー憲法が起草された地である。そこで汽車を見た時、私はびっくりした。生まれてこの方一度も汽車を見たことがなかったからである。並行に走る鉄道線路を見て、汽車はどのようにしてひとつの線路から隣の線路に移れるのかと不思議に思ったものである。しかしともかくも私たちは汽車に乗り、首都クリスチャニアに到着した。

ここクリスチャニアで起きたちょっとした

出来事を話したいと思う。私が同行する約束をしたのがここまでであったことは御承知であろう。私たちはクリスチャニアの駅から、オステルハウズケーテン27番地にあるこの教会のノルウェー伝道本部に案内された。そこに滞在する間に、ホールである集會が開かれた。両親からその集會に出るように言われたが、私は断わった。反感を持っていたことはすでにお話したと思う。そこに、私が両親の言うことをきかないのを見ていた女性がいて、こう言った。「あなたが私の子だったら、立てなくなるまで、むちで打ってやるでしょうね。」私はその言葉を聞きながら、自分は足が速いから、そう簡単にはつかまらないさと思ったものである。

そこからまだ先へ一緒に行くことになった理由はこうである。家族は私がリングセイカーの家を離れる時に言ったことを覚えていた。そして、姉のアグニーテも私が行かなければ自分も行かないと言っていた。父は帽子屋へ行行って、弟のマシアスと私に格好の良い茶色の帽子を買ってきてくれた。父は何も言わなかったが、悲しそうだった。そして両親の悲しげな姿を見た時、聖書で読んだ言葉が思い出された。「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。」私は家族に同行することにした。すると家族はとても喜んだ。私はこのように心を変えたことを決して後悔していない。

一日ふつかして、家族全員、小型蒸気船でデンマークの首都コペンハーゲンに向かった。私は教会員でなかったので、讃美歌は歌わず、みんなのような幸福感はなかったが、家族が非常に幸せだということはよくわかった。その時に皆が歌った讃美歌のひとつを私は今でもよく覚えている。「バビロン、バビロンいざさらば。エフライムの山にゆかん。」もちろんノルウェー語の歌詞であった。私たちは蒸気船で一夜を過ごした。船室では横になる場所がなかった。そこで私は、穀物袋を積み上げた

上によじのぼり、そこで寝た。ところが私がそこで良い気持ちで眠っていた間、それを知らない両親と家族は私のことをひどく心配し、血まなこで捜していた。けれども見つからずに、とうとうあきらめたという。私がユタに行きたくないと思っていたことを知っていた上に、私が部屋を出て行く様子からして、家族は私が海に飛び込んだと考えたようである。そのため、私を見かけたとある人から聞いた時に、私が無事であることを一応は喜んだものの、実際に姿を見るまでは信じなかった。それまで私が両親を喜ばせたことは一度もなかったとしても、この時だけは喜んでもらえたと思う。

私たちはデンマークのコペンハーゲンに着くと、ユタへ移住する人が300人程になるまでそこで待った。後にヒーバー・J・グラント大管長の副管長となった、アンソン・H・ランド長老が、そのユタ移民団の団長であった。私たちはコペンハーゲンを出発し、北海を渡ってイギリスのハルに向かった。出航当初、天候は晴れで、ノルウェーを発った時と同じように聖徒たちは楽しそうに歌を歌った。ダンスをする者もいた。しかし間もなく波のうねりが激しくなってきた。そうする内に、船酔いを起こして船のデッキから身をのり出す人も出始めた。よくまあ、魚のえじきにならなかったことだと思う。私は彼らの様子を見て、何ということかと失笑した。しかし笑っていられたのはほんの少しの間で、次は自分の番だった。こうする内に、無事にハルに着いた。そしてそこからリバプール行きの列車に乗った。それからおよそ8時間後にリバプールに着き、そこからさらに北アメリカのニューヨークに向かう蒸気船「ネバダ号」に乗った。

大西洋を渡るのに14日かかった。途中海はひどく荒れ、私はずっと船酔いに悩まされた。しかし私たちは、無事にニューヨークに入港した。そこからユタ行きの汽車に乗り、4日後の1872年7月17日の夜遅く、私たちはソル

トレーク・シティーに到着した。駅に到着する前に私たちは団長のアンソン・H・ランド兄弟から、駅では大勢の親戚や友人の出迎えがあり、家に招待される人もいだろうが、「そこでついて行かないように。全員が歓迎会に出席することになっているので、逆に親戚や友人を一緒に連れて来てほしい」と言われた。

夜の10時頃であった。家の名前は知らないが、全員一緒にテーブルに着けるくらい大きな会場であった。私の記憶では300人はいたと思う。けれども私だけは会場に入らなかった。自分には関係がないと考えたからである。みんなは末日聖徒だが、自分は違う。先程も述べたように、私はかなりの反感を抱いていたのである。私がひとりしていると、そこへランド兄弟がやって来て、両親はどこにいるのかと尋ねた。私は、家族はみんな中に入っており、自分は教会員でないのでここにいますと返事をした。するとランド兄弟は私の腕を取ってドアの所へ連れて行き、デンマーク語で、「どうぞ、中へお入り下さい。歓迎します」と言った。むろん、私は中へ入った。それは、おいしそうなごちそうがそろった生まれて初めての豪華な食事会であった。食事がすむと、もう真夜中近かった。しかしテーブルの上にはまだたくさんのごちそうが並んでいた。おかわりをしてみんなにゆきわたった。

私たちは、招いてくれる人がだれもいなかったもので、そこに朝方までいた。ほかの人々はどうしたのかしらない。私はテーブルのわきの長椅子に横になって眠ってしまい、目が覚めた時には太陽が高く昇って、みんなは忙しく立ち働いていた。テーブルにはまだ食べ物がたくさんあったので、朝食を待つまでもなく、みんなは食事をした。私も食べたが、その朝も前夜の夕食と同様、豪華な食事であった。

やがて、言葉も知らない見知らぬ土地で何を始めたらよいものかと考え始めた。人々の

話を聞いても、何を話していることやらわからなかった。しかしやっとひとりの人がやって来て、デンマーク語で、ついて来て下さいと言った。ついて行った所は昔の什分の一管理事務所で、私たちは、自分たちの荷物と、そのほかに少しの食料を受け取った。私たちはそこで2日目の夜を過ごした。その日、私はソルトレーク・シティの町を見たいと思った。季節は夏で、六月りんごの熟す時期であった。おいしそうなりんごであった。しかしそれを下さいと言うことができなかった。もしも断わりなしにりんごを取れば、お金を取ったと同じ盗みになる。ところが、垣根の下においしそう赤いりんごが落ちていた。私はかがみ込んでそのりんごを手に取り、そのまま立ち去ろうとした。すると数歩行ったところで、「ちょっと待ちなさい！」という声が出た。ノルウェー語でも英語でも、「待ちなさい」という言葉は同じであったので、声をかけられた私はもちろん立ち止まった。

しかし、声をかけた人は家の裏にまわった。私はまた歩き出したが、その私を見ていたのだろう。彼は家越しに、また「待ちなさい」と叫んだ。私はおどおどしていた。許可なしにりんごを拾ったからである。彼はきっと私を打つむちを取りに行ったのだろうと思い、ノルウェーだったらどういう罰になるかと考えていた。ところが、彼はむちではなく、真赤に熟したおいしそうなりんごを帽子にいっぱい入れて持ってきた。門まで戻った私に、彼はひとつずつ、私の両手がいっぱいになるまでりんごをくれた。英語で何かを言ったが、私にはわからなかった。しかし手振りで、りんごをポケットに入れるようにと言っているのがわかった。上着に大きなポケットがついていたからである。こうして彼は、たくさんのりんごを私にくれた。

私はこの出来事で受けた強烈な印象を決して忘れない。ひとつのりんごを取った私を責めることなく、帽子いっぱいのにんごをくれた教会員の心を。以前私は反感を持っていた

と言ったが、率直に言って、この出来事と前の晩の歓迎会のことで、その気持ちはすっかり消えてしまっていた。それはどんな説教よりも立派な説教であった。模範は言葉よりも多くを語るのである。

私は什分の一管理事務所の家にいる両親と家族のもとに帰った。もちろんりんごをおみやげにできたことはとてもうれしかった。みんなはどうしてかとびっくりした。りんごを買うお金など持っていないことを知っていたので、「盗んで来たのか」と言われた。そこで私は、「町の人からもらったんだよ」と言った。家族のみんなは、ユタにはノルウェーよりも良い人たちが住んでいるに違いないと話し合った。私もそのように思い始めた。

私たちは叔父のモンス・アンダーセンから、リーハイに住む自分の家族のところに行くようにと勧められていた。ちょうどその晩、ひとりの教会員が、リーハイに行くので家族のふたりを連れて行ってあげようと言ってくれた。そこで母と弟のマシアスが彼に同行した。残りの家族はまた別の人が連れて行ってくれるということであった。リーハイまで線路がまだ敷かれていなかったため、鉄道は使えなかった。残りの家族は翌日まで什分の一管理事務所の家泊まった。翌日は1日待ってもだれも来なかったが、その次の日、1872年の7月20日に、リーハイからマシアス・ピーターセンという名の人が真新しい上等の馬車で私たちを迎えに来てくれた。私たちは大喜びした。出発してからサンディーにさしかかった所で夜を明かし、翌日、1872年7月21日の日曜日の朝、リーハイの町に到着した。

ここで、1872年7月21日の日曜日のことについて少しお話しなければならないと思う。先程書いたように、私たちはサンディーにさしかかる所で一夜野宿した。翌朝は良い天気だ、出発前に腹ごしらえをすることになった。全部で5人で、小麦パンが幾らかあるだけだった。そこで、少し離れた所にある農家まで、御者のマシアス・ピーターセン兄弟がミルク

をわけてもらいに行った。やがてピーターセン兄弟はひとりの婦人を連れて戻ってきた。彼女はおいしそうなミルクをなみなみたえた小なべを抱えていた。私には、野宿も、小麦パンとミルクの食事も初めての経験だった。それがなんとおいしかったことか。私はそのことを決して忘れないだろう。私はとてもうれしかった。あの婦人がおいしいミルクを私たちに持ってきてくれたことが、本当にありがたかった。彼女が末日聖徒であったかどうかはわからない。しかし当時ユタには末日聖徒しか住んでいないだろうから、きっと彼女も末日聖徒に違いない。この出来事も、この教会に対する私の心証を良くした。

私たちは11時頃にモンズ・アンダーセン叔父の家に着いた。するとクリスチン・アンダーセン姉妹が出て来て、私たちを一人一人腕に抱き、キスをした。私の順番が来たが、そういうことに慣れていなかった私はどうしたらよいかわからなかった。しかしどうしたわけか、逃げ出すということもなかった。近所の子供たちや老人たちがやってきて握手をした。歓迎の挨拶をしてくれたのだと思うが、英語は少しもわからなかった。子供たちは日曜学校に行っていたが、すぐ家に帰ってきて私たちに歓迎のキスをしてくれた。この頃には私も大分慣れていた。こうして私たちはくつろいだ。

私が改宗に導かれたのには、もうひとつ大きなきっかけがあった。丁度、いちごやすぐりや早生りんごなど、たくさんの果実が実る時季であった。アンダーセン姉妹に会った人なら、彼女がやさしい人であることはすぐにわかる。そのアンダーセン姉妹が「外へ行って、お好きに召し上がれ」と言ってくれた。彼女のやさしい仕草がなければ、言葉の意味がわからなかっただろうと思う。そのように彼女には愛情あふれる雰囲気があった。ノルウェーではそのような経験が全くなかった。それによって私は教会にさらに近づいた。

私はそれまで、言葉の違う知らない国でど

うして生活をしていったらよいか、考える時間がなかった。ところが1872年7月26日、金曜日の朝に、畑仕事を手伝ってくれる男の子が欲しいという人がアンダーセン家にやって来た。名前をピーター・ピーターセンといった。賃金は月8ドルであった。私は彼の所で1年8ヵ月ほど働いた。ここでその当時のちょっとした出来事をお話しなければならない。当時は新しく移って来た人は再バプテスマを受けることが習わしとなっていた。そのため、ピーター・ピーターセン兄弟の奥さんのカレン・ラーセン・ピーターセン姉妹が私にこう言った。「今日、バプテスマがあるわ。だから、馬車の用意をして、バプテスマをする水車場にこの方々をお連れしてね。そして、あなたもバプテスマを受けてね。」私はピーターセン姉妹に、受ける人たちは喜んでお連れするが、自分はまだ用意ができていないからバプテスマは受けないと答えた。

その年の冬、私は学校に通い始めて英語が少しわかって来た。モンズ・アンダーセン家の男の子たちと一緒に日曜学校にも通った。エイシャ・バック兄弟が教師であった。順番に聖書をまわし読みしたが、私の番が来るとバック兄弟が代わりに読んでくれた。彼らの言っていることは理解できなかったが、私は楽しかった。日曜学校が私の楽しみになってきた。しかし1873年2月7日に、病気であったカレン・ラーセン・ピーターセン姉妹が亡くなり、私は学校を退学した。それまでに勉強は進んで、第3読本に入っていた。

私は福音も勉強して、祈っていた。私は、ヨハネ伝3章に記録されているニコデモに対するイエスのみ言葉を知っていた。「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。」そこで、1873年8月30日、リーハイにおいて、私はモンズ・アンダーセン叔父からバプテスマを受け、アブラハム・ロジャー兄弟から確認を受けて末日聖徒イエスキリスト教会に入った。

どちらでも違いはないわ

バーバラ・ポール



19 75年1月11日の午後1時35分、近所の店へ買い物に行く途中でのことでした。歩道を歩いていると、時速60キロ以上のスピードで走ってきた自動車が運転を誤り、私はその自動車と電柱の間にはさまれてしまいました。たまたまその場に警察官が居合わせ、すぐに無線で救急車の手配をしてくれました。それから、私を助け出してくれました。特に私の足のけがはひどく、止血が必要でした。けれども、止血帯を当てることもできない状態でした。病院に着いた時、私はすでに仮死状態でした。けれども、先生方の懸命な努力のお陰でどうにか一命をとりとめることができました。私は監督から素晴らしい祝福を受けた後、手術室に運ばれました。多分足を切断することにな

るだろうと、先生はおっしゃっていました。その時、事故現場の調査官が10センチ程の長さの大腿骨の一部を見つけて急いで病院に届けて下さいました。私の足を残すかどうかの決定をするという時に、その骨が手術室に届いたのです。結局私は足を失いましたが、もしその時すぐに足を切断していたら、15センチ余りの太ももの部分を残すことさえできなかったはずです。

事故の後、大勢の友人や親戚が私と家族のためにいろいろして下さいました。ワード部の人々のお陰で、両親は数ヵ月間、私に付添うことができました。またワード部の人々は私たちに食事を運んで下さったり、お世話をして下さいました。大きな愛と心遣いを示して下さいました。

私が初めてミュージャカルに出席したのは、翌年入ってくる少年少女を招待して行なわれた年度末の親睦会の時です。招待を受けた時、私はとても驚きました。手術の合間に数日間帰宅しただけでまた病院に戻らなければなりませんでしたが、車椅子を使っていたからです。みんなはそれでもよいと言ってくれました。そこで私はみんなに助けられて出席しました。とても楽しい会でした。

新年度になり、私はまた病院暮らしに戻らなければならなかったにもかかわらず、ビーハイブクラスの第2副会長に召されました。その年、クラスの人々は私のために本当に良くしてくれました。監督の家で行なわれた集會に私が出席できなかった時、皆はその会の最初から最後まで録音してくれました。新年度パーティーの様子もテープに録音して、病院に持ってきてくれ、みんなで一緒に聞きました。

私が松葉杖で病院から出られるようになると、ステーキ部のビーハイブアドバイザーから「リングの種」という劇に出るよう頼まれました。私はそのことで、自分は愛されている、自分は必要なのだと感じました。

つらく苦しい9ヵ月間に、足を残すため34回も手術を受けた後で、先生は足の切断を勧めました。私は両親や天のお父様の助けによって、切断手術の決心をしました。1975年9月24日、12歳のことでした。それを知ったクラスの人々は、親切に「どちらでも違いはないわ」と言ってくれました。

35回目の最後の手術を受けるために病院に入った時も、クラスの人々はレッスンを教えてくれたり、元気な顔を見せて私を喜ばせてくれました。集會に出席できなくても、すべての計画に私を参加させてくれました。そのため、どんな楽しいことが行な

われているかわかりましたし、早くよくなって一緒に活動したいと思いました。

それから5ヵ月ほどして、ワード部では「建国200年祭春の祭り」が開かれ、私たちのクラスも参加を求められました。もちろん、私もです。その頃私は義足をつけていました。クラスの友達は、私が舞台上で素敵に見えるようによく手伝ってくれました。舞台から退場して正面の階段を下りる時、私があとに残って目立つことのないように、みんなでまともまって一緒に下りてくれました。それがごく自然に見えました。私は何かするように頼まれてもしりごみする必要がないということを教えられ、気持ちさえあれば人にできることは何でもできることを知りました。

夏になると、私はクラスの友達に自転車の乗り方を教えてもらいました。6回程転びましたが、その度に、起き上がり、ついに自転車に乗れるようになりました。今ではみんなと一緒にサイクリングに出かけ、とても楽しく過ごします。

去年のさよならパーティーでは水泳をしました。本当は行きたくなかったのですが、母や友達に、出席するだけでもよいからと勧められて出かけました。それで会場に行くと、みんなはとても楽しそうでした。それにつられて私は、母に電話をかけ、水着を持ってきてもらいました。私は義足をはずして水着を着て、友達にプールまで連れて行ってもらいました。それはそれは楽しい一時でした。みんなはよくわかってくれて、私が恥ずかしい思いをしないようにしてくれました。

ビーハイブ2年目の今年、私は会長に召されました。良い仕事をして、自分が手伝ってもらったように、ほかの人々を手伝いたいと思います。

聖徒の道

1978年7月20日（毎月1回20日発行） 第22巻第7号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

